
Ring

如月 みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i n g

【Nコード】

N 1 7 0 2 V

【作者名】

如月 みつき

【あらすじ】

友人の手酷い裏切りに、傷ついた美桜^{みお}は雨の公園で意識を失った。「何故、どうして？」

異なる絶望が繋がる時、運命の歯車が動き出す。

その出会いには救いとなるのか……。それとも……。

異世界召喚ファンタジー開幕！

序章（前書き）

R15指定をつけておりますが、一応予防線ということ。
これくらいだったらいいよー、というご意見がありましたら、
ぜひ教えてくださいませ。

序章

「ねえ、何で笑ってんの？ 気味悪いんだけど」

それは数時間前、美桜^{みお}が友人から投げつけられた台詞だった。親友だと思っていた。そう信じていた。>br<>br<

いつものように一緒に帰ろうと、正門の前で待っていた。彼女は駆け足でやってきて、唐突に告げたのだ。クラスメイトの男子と付き合うことになった、と。>br< その瞬間、美桜の周囲から音という音が綺麗に消え失せた。早鐘のように打つ鼓動が、激しい動揺を物語っていた。>br< 悪い冗談だと思った。だって彼女は美桜がその男子を想っていると知っていたからだ。予期せぬ告白に思考がうまく働かず、ただ曖昧に微笑むしかなかった。>br< すると彼女はその可愛らしい顔を歪めて吐き捨てるように言ったのだ。好きな男を取られても、へらへら笑ってるんだ。マジでキモイんだけど、と。>br< 怒って、喚いて、詰って、酷いと言いながら、つかみ合いの喧嘩でもすればよかったのだろうか？>br< けれど美桜はそうしなかった。できなかった。極端に人と争うことが苦手な性格だというのもあるし、その男子と付き合っていると、いうわけでもなかったからだ。>br< 美桜の一方的な片思い。彼女は同性の美桜から見ても潑刺とした美人で、だから二人がそうなっても仕方がないと思うのだ。>br< 争ってまで手に入れるより、諦める方を選ぶ、美桜——小早川 美桜——はそういう人間だった。>br< 捨て台詞と共に立ち去った友人を、ぼんやりと見送ったことは覚えている。その後は何をどうしたのか、よく覚えていない。>br< 気が付くと家の近所の公園にいた。>br< きい、きい、と微かに響く金属音。ブランコを漕ぐ音が、こんなにも物悲しいのはどうしてだろう。いつの間にか日が暮れ、辺りはすっかり暗くなり、おまけに雨まで降ってきた。>br< (何故、どうして？)>br<

口にできなかった台詞を心の中で呟く。 > b r < 頬を濡らすのは決して雨だけではない。温かなものが、次から次へと溢れて止まらない。 > b r < 制服のブレザーが雨をたつぷり吸いこんで重い雨はブラウスの内側まで染み込んできて、肌を濡らしていた。独特の匂いが鼻をつく。 > b r < (制服、乾かさないと) > b r < いつまでもここでこうしているわけにはいかない。女手ひとつで育ててくれている母に、心配をかけるわけにはいかないのだ。 > b r < さつさと家に帰って、温かいお風呂に入って、気持ちを落ち着けよう。 > b r < 現実を強く意識することで、心の悲鳴に耳をふさぐ。それは血を流す傷口に適切な処置を施さず、ただ闇雲に包帯を巻く行為のようだった。 > b r < やけに冷静な自分に苦笑しつつ、ブランコから立ち上がった時、美桜は軽い眩暈に襲われた。 > b r < > b r < 「……何故、どうして？」 > b r < > b r < 同時に聞き覚えのない男の声が耳朶を打つ。胸を鷲づかみにされるようなその声に、美桜の傷が疼きだす。 > b r < (引きずられる！) > b r <

何故だかそう感じた瞬間、美桜は意識を失った。 > b r <

第1章 鏡映しの二人（1）

体が燃えるように熱くて、鉛のように重い。頭はずきずきと痛み、喉はからからに乾いている。熱を持った体に、ひんやりとしたシーツの肌触りが心地よかった。朦朧とする意識の中、美桜は腫れぼつたい瞼をゆるゆると持ち上げた。>br< 薄明かりの中、こちらを覗きこんでくる人影をぼんやりと意識する。長い漆黒の髪とほっそりした首が、その人物が女性だと教えてくれる。どこか見覚えのあるその顔を、もつとはつきり見ようと美桜は眉をしかめた。>br< 彼女の唇が動く。ひどくゆつくりと、柔らかな笑みを刻んで。>br< 次いで口元に何かが差し込まれた。抵抗する力もなく、されるがままになつていると、差し込まれた何かから、ほんのりと甘い液体が流れ込んでくる。>br< これは何だろう、と疑問を感じる前に、体は貪欲なまでにそれを求めた。もつと、もつと、と喉がひくつく。>br< ひどい渇きが癒えると、美桜の意識はまた混濁していった。深く、深く沈んでいく。眠ることで傷を癒す動物のように、深い眠りに落ちるのだった。>br<>br<

美桜が意識をはつきりと取り戻したとき、傍には誰もいなかった。>br< 無駄に広い室内に、ぼつんと置かれたベッド。三人くらい余裕で寝られそうなベッドの上に、ゆつくりと体を起こす。ぎしぎしと音がしそうなくらい、関節という関節が痛んだ。熱は引いたみたいだが、まだ恐ろしくだるい。>br< それにしてもここはどこなのだろう、と美桜は首を捻った。>br< 雨に打たれながら、公園のブランコに座っていたはずだった。家に帰ろうとして立ち上がったとき、見知らぬ男の人の声を聞いて、それで急に目の前が暗くなつたのだ。>br<（貧血……かな？）>br< 精神的なショックに加え、雨に濡れて体がすっかり冷え切っていたのだ。そのせいで軽い貧血でも起こしたのだろう。美桜はそう結論付ける。

> b r < (どれくらい眠ってたんだろう。お母さん、心配してるだろうな) > b r < この家の人が連絡してくれていればいいのだけれど。そう思いながらも、早く母に無事を知らせたくて、携帯電話を目で探す。 > b r < だっ広い室内には、美桜が身につけていた制服もなく、もちろん鞆も見当たらない。意識を失っている間に着替えさせられたのだろう、着ている寝巻きに視線を落とし、軽く目を見張った。 > b r < (つるつるしてる) > b r < 光沢のある布地はサテンではなく、きつとシルクなのだろうと思わせる極上の手触りだ。しかもパジャマではなくて、まるでドレスのようなものである。女の子が喜びそうな、リボンやフリルやレースが、ふんだんにあしらわれているのだ。 > b r < 「……？」 > b r < 美桜は再び首を捻った。近所にこんな豪邸があったのだろうか。無意味に広い寝室から察するに、きつと大きな邸宅に違いない。それにたかが寝巻きに、このお金のかけよう、きつと相当なお金持ちに違いない。 > b r < 家の人を探して、お礼を言つて、制服と鞆を返してもらわなくては。 > b r < そう思つてベッドから降りようとしたとき、正面の扉が開いたのだった。 > b r < にやかな笑顔を浮かべて部屋に入ってきたのは、ロマンスグレーの渋いおじ様だ。どこなく品のある面立ちをしているおじ様は、もちろん美桜の知らない人物で、わずかな警戒心が頭をもたげる。寝巻きという無防備な姿を見知らぬ、それも男性に晒すのは抵抗があつたのだろう。無意識のうちにシーツを胸の辺りまで引つ張り上げる。 > b r < 「いきなりで驚かせてしまったようだね。それにしても気がついてよかった。君は丸三日間熱にうなされていたのだよ」 > b r < 目を細めて頷いている男性は、たちまちベッドの脇まで近付き、美桜の顔を覗き込んだ。 > b r < 「あの、あなた誰ですか？」 > b r < 距離を詰められて、美桜は小さく身震いしながらベッドの上を後ずさる。 > b r < 「これは失礼。私の名はゲルハルト。ゲルハルト＝ディディエ。この館の主だよ」 > b r < につこり笑うゲルハルトの瞳に、人をからかっているような節は見受けられない。 > b r < 名前か

らして彼が外国人だというのがわかる。よく見ればかなり長身だし、日本人にしては彫りが深い。瞳の色も光の具合で濃い緑色にも見える。流暢な日本語を話す外国人。そんな人が近所に住んでいるなんて聞いたことがない。>br<「あの、ここはどこですか？」>br<「グロシアとの国境にある、マイトリイ王国ディディ伯爵領だよ」>br<「ぐりしあ。まいとりいおうこく。でいでいえはくしゃくりよう？」>br<「耳慣れない単語に、美桜はきょんとしてしまふ。一体何の冗談だろう。確かテレビでこんな番組があつたような気がする。どこかに隠しカメラが仕掛けてあつて、こちらの慌てふためく様子を収めているのではないだろうか。美桜はただぽかんとするばかりだ。」>br<「では、次はこちらから質問させてもらつよ。君の名前と出身国は？ それにどうしてあんな場所で倒れていたかを教えてもらいたいのだがね」>br<「急に肌寒さを感じて、美桜は両腕で体を抱き締めた。ゲルハルトは相変わらずにこやかな表情を崩さない。けれど有無を言わさない何かが眼差しに込められていて、戦慄^{わなな}く唇を開いた。」>br<「……小早川 美桜といえます。出身国は日本です。公園で意識を失つて、気がついたらここにいました」>br<「不安と混乱を抑え込み、何とか言葉を紡ぐ。ふとゲルハルトを見上げると、彼は微かに眉間に皺を寄せじつとこちらの様子をうかがっている。彼は美桜の返答を聞いても目立った反応を示さなかった。馬鹿げた質問に怯えながら答えてしまった自分が、恥ずかしかつたというのもあつて、美桜はつい喧嘩腰になつてしまふ。」>br<「まいとりい王国つて、どこにあるんですか？ これ、テレビか何かの企画なんでしょう？ もう十分驚きましたから、だからもういいでしょう？ 携帯返してください！それに制服も。きつとお母さん、心配してるから……」>br<「美桜が言葉を重ねれば重ねるほど、ゲルハルトは表情を失つていく。半ば叫ぶように携帯を返して、と言つた美桜を一瞥すると、ゲルハルトは無言で部屋を出て行つてしまった。」>br<「……何なのよ……これ」>br<「全力疾走したときよりも、心臓が激しく

暴れている。わけのわからない事態に直面した美桜は、否応なく高まる不安に、押し潰されそうになっていた。>br<

第1章 鏡映しの二人（2）

ゲルハルトの背中を言葉もなく見送った美桜は、途方に暮れてうつむいていた。自分の置かれた状況が全く把握できない。想像もつかない事態に巻き込まれてしまったのだ。行動を起こそうにも、寝巻のままでは心許無いことこの上ない。闇雲に動いて状況が好転するとは思えなかった。>br<（……どうしよう）>br< 心細くてたまらない。気を緩めれば泣いてしまいそうで、でも泣いてしまえるほど、樂觀視できる状況だと言い難い。>br< 何か考えていないと、どうにかなってしまいそうで、美桜は気持ちを落ち着けるためにも、与えられた情報を整理してみる。>br< グリシアとの国境にあるマイトリイ王国デイエ伯爵領。そうゲルハルトは言っていた。ゲルハルト「デイエと名乗ったあの男性が、きっとデイエ伯爵その人なのだろう。」>br<（伯爵ってことは、貴族ってことで。ということは偉い人、なのかな）>br< 世界史で習った、中世ヨーロッパを思い浮かべてみる。国の頂点には王がいて、その下に公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、という位があつたように記憶している。>br< 平民、つまり一般市民よりは地位も財産もあるのだろうと推測する。あくまでマイトリイ王国が、中世ヨーロッパと同様の形態をとっているとしての話だが、>br< 気持ちを鎮めようと努力していると、控え目なノックの音が聞こえてきた。今度は誰が来たのだろう。緊張からか美桜は息を殺し、ベッドの上で体を強張らせた。>br<「お加減はいかが？ ミオ」>br< 朗らかな声の主は、栗色の髪をすっきりと結い上げて、深緑色を基調としたドレスに身を包んだ妙齡の女性だった。>br<「私はキイナ。ゲルハルトの妻よ。まあ、本当にそっくりだね。眠っているときも、よく似ているとゲルハルトと話していたのだけれど、やっぱり瓜二つだね。まるで双子の姉妹みたいね。さあ、これに着替えなさい。サイズは合っていると思うわ」>br<

< 何の反応も示さない美桜に怯むことなく、キナと名乗ったゲルハルトの妻は、手にした紺色のドレスを押しつける。> b r < ドレスに着替えてどうしろというのか。唇を噛みしめてうつむいていると、しばし背中を叩かれた。> b r < 「……っ！」> b r < 容赦ない平手に顔が歪む。涙目になった美桜は多少の非難を込めて、傍らに立つキナを見上げた。> b r < 「何か深い事情があるのでしよう。けれどそうして不貞腐れていれば解決するものなのですか？」> b r < 別に不貞腐れているわけじゃない。ただ漠然と怖いのだ。> b r < 家の近所の公園で意識を失い、気がついたら全く知らない世界——マイトリイ王国という異世界——にいたのだ。正気を保っているだけでも褒められて然るべきだと思う。> b r < 「あなたが身につけていた衣装は、大切に保管してあります。心配しなくても取り上げたりなどいたしません。ですから今は安心して体の回復に努めなさい。今後の身の振り方は、それから考えましよう。私達夫婦も力になると約束します。だってあなたのその顔を見てもしまったら、とても他人とは思えないのですもの」> b r < 携帯を返して。制服を返して。> b r < ゲルハルトに叫んだ言葉がそのまま伝わっているようだった。> b r < 親しみのこもった眼差しを向けられて、美桜は子供っぽい言動を恥ずかしく思った。どういう経緯でデイディ伯爵邸にいるのかわからないが、伯爵夫妻が高熱にうなされた、赤の他人である自分を看病してくれたことに違いはない。> b r < そういえばまだ礼も述べていなかった。はたとそのことに気付いた美桜は、ベッドの上に正座すると深々と頭を下げた。> b r < 「助けてくださって、ありがとうございます！」> b r < おずおずと顔を上げると、満面の笑みを浮かべたキナと目が合った。キナはまるで少女のように、くすくす、と笑い、紺色のドレスを広げ着替えを促したのだった。> b r < キナに手伝ってもらいながら、気慣れないドレスを身に纏った美桜はほっと胸を撫で下ろした。資料で見た中世の貴婦人が付けていたというコルセットを、付けなくて済んだからである。あんな物を付け

たりしたら、きつともつと具合が悪くなつてしまふに違いない。>
br< ほんの少しだけキイナに気を許した美桜は、気になつていたことを尋ねてみる。> br< 「私、誰かに似てるんですか？ 双子の姉妹みたいだとか、他人に思えないとかつておば様、言つてましたよね」> br< そうなのだ。キイナのあの口ぶりから察するに、デイディ伯爵夫妻に縁のある人物に自分はよく似ているらしいのだ。> br< 着替えを済ませた美桜は、温かい野菜のスープを口にしていた。それは化学調味料など一切使っていない、素材のもつ味を最大限に生かした塩味のスープだった。素朴な味が今はひどく心を落ち着かせてくれる。> br< ふわりと香る香草が、程よく胃を刺激して、あつという間にスープを平らげてしまった。> br< 「娘のシンシアに生き写しなのですよ。目立って違うところといえば、髪の毛の長さくらいかしら？ ああ、それと瞳の色ね。あの子の瞳は光の加減で深緑色に見えるから」> br< ほつれた髪を撫でつけると、キイナは微笑んだ。> br< 生粋の日本人である自分が、外国人であるシンシアと瓜二つだと言われても、いまいち信じられない。> br< 半信半疑のまま、美桜は曖昧に頷く。そういうえばこのドレスも、その娘さんのものなのだろうか？ ドレスの丈などはぴつたりなのだが、胸の辺りがぶかぶかで、年頃の娘としてはちよっぴり傷付いていたのだが。> br< 「ミオを見つけたのもあの子なのよ。今は所用で留守にしているけれど、もう直ぐ帰ってくるわ。きつと驚きますよ。まるで鏡に映したみたいにそっくりなのですから」> br< ふふふ、とどこか寂しそうに微笑むと、キイナは空になった器を手になち上げる。> br< 後で庭を散歩しましょう、と言いついて、キイナは部屋を出て行った。> br< 自分とそっくりな異世界の少女シンシア。伯爵令嬢の少女とは、どんな人物なのだろう。束の間、不安を忘れて、まだ見ぬ少女シンシアに思いを馳せる美桜だった。> br<

第1章 鏡映しの二人（3）

それから一週間が過ぎた。>br< どんなに家に帰りたと思ったところで、どうしたら帰れるのかわからない。そもそもどうやってこの世界にやってきたのか、それすらもわからないのだ。今の美桜にはどうすることもできなかった。>br< 信じてくれるかわからなかったけれど、デイディエ伯爵夫妻にはありのままを打ち明けた。>br< 伯爵夫妻はひどく驚いて、信じ難い話だと言っていたけれど、美桜が身に着けていた衣服や持ち物（特に携帯）が、これまで目にしたことのないものばかりだったということもあり、結局信じるしかないという判断を下したようだった。>br< ただ、美桜が違う世界からやってきたということは、軽々しく口にしてはいけないと言われた。気が触れているふりをした他国の間者、という烙印を押されてしまう可能性があるからだそうだった。>br< 遠い大陸から海を渡って売られてきた奴隷で、それを憐れに思ったデイディエ伯爵夫妻が引き取った、という身の上になれば、この世界の知識に疎くても怪しまれないはずだと、夫妻は言うのだ。>br< 帰る方法が見つかるまでは、嫌でもこの国で暮らさなければならぬ。日常生活のあれこれを、美桜はキナから教わるのだった。>br< マイトリイ王国は君主制で、現在の王の名はデイストリア・マイトリイといい、先王の第三王子だったという。>br< 余程の問題がない限り、長子相続という決まりがあるマイトリイ王国で、第三王子が王位に就いたのにはそれなりのわけがあった。>br< 先王が病死した後、それを追うように第一、第二王子が次々に亡くなったのだという。>br< それ故、第三王子であったデイスが王位に就いたのだそうだった。王位継承はつつがなく執り行われ、貴族達も皆忠誠を誓ったという。>br< だがそれはあくまで上辺だけのこと。二十三歳という若さと、本来ならば王位を継ぐはずのなかった王子ということもあって、水面下では様々

な駆け引きがなされ、数多くの陰謀がまことしやかに囁かれているのだという。>br< 美桜が暮らしていた日本とは、あまりにかけ離れた王国だった。>br< 国内の混乱に乗じて、隣国ギリシアが攻め込んでくるかも知れない。最初はギリシアの手の者かと、美桜を疑っていたのだそうだ。>br< 今ではその疑いも晴れ、デイディエ伯爵夫妻には親切にしてもらっている。貴族だというのに、実に親しみやすく、鼻にかけたところが少しもない。使用人達もみな主人である夫妻を慕っているということが、この一週間でよくわかった。>br< 世話になるばかりで、何もできない美桜は心苦しい思いをしていた。何か手伝わせて欲しいと申し出たのだが、やんわりと断られてしまった。いつかきつと、親切にもらった恩返しをしたい。美桜は強く心に誓うのだった。>br<>br< そしてようやく、留守にしていたデイディエ伯爵夫妻のひとり娘シンシアが、旅先から戻ってきた。>br<>br< 伯爵夫妻と使用人達に出迎えられたシンシアが、馬車から降り立つ。美桜は柱の後ろに身を隠し、親子の再会を見守っていた。>br< 目の覚めるような真つ青のドレスを身に纏ったシンシアは、淑やかな仕草で足を進めると、夫妻の前で軽く膝を折る。>br<「ただいま戻りました」>br< にこり、と微笑む顔を見て、美桜は目を見張った。>br< 円い瞳。少し低い鼻。小さくて薄い唇。卵型の輪郭。ふつくらした頬。>br<「……嘘」>br< 思わず声に出してしまう。実際に目にするシンシアの顔立ちが、驚くほど自分に似ていたからだ。浮べている表情は、美桜には真似できないようなものだっただけだ。>br<「ミオ、いらつしやい。娘のシンシアを紹介するわ」>br< 柱の後ろに隠れていた美桜を振り返り、キイナが手招きする。その場に居る者達の視線が、一斉に美桜に注がれる。視線の集中砲火を浴びて、いささか怯みはしたものの、しっかりとした足取りで、シンシアへと歩み寄る。>br<「すっかり元気になったのね。よかったわ」>br< ふんわりとした、綺麗な笑顔を向けられて、美桜はぎこちなく微笑み返す。自分と同

じ顔が、見たこともないくらい綺麗に微笑んでいるというのは、何だか居心地が悪い。>br<「お父様。お母様。大切なお話があります。ぜひミオにも聞いていたきたいの」>br< 微笑みを消したシンシアは、怖いくらい真剣な表情で、三人を客間へと誘った。

>br< 使用人達にしばらく近付かないように言い含めると、シンシアは扉の鍵を閉めてソファーに腰を下ろした。デイデュー伯爵夫妻と美桜もそれぞれソファーに座る。>br< 美桜といるときにはいつもにこやかな表情を絶やさなかった夫妻が、強張った顔をして娘の言葉を待っている。>br< 本当に同席していいのだろうか、と美桜は不安だった。何だか家族会議、それもかなり難しい話が始まりそうな雰囲気である。>br<「準備は滞りなく進んでいます。来週には後宮に参らねばなりません」>br< 固い声音でシンシアが告げた。夫妻も無言で頷いている。>br<「行く当てがないのなら、私の代わりにお父様達の傍にいてくれないかしら？」>br< 黙って小さくなっていた美桜は、その台詞が自分に向けられたものだと思わなかった。>br<「ダメ、かしら？」>br< 複数の視線を感じて、はっと顔を上げると、シンシアが困ったようにこちらを見ている。>br<「……え？」>br<「王の側室として、後宮に入ることが決まってから、私、ずっと両親のことが心配だった。そんな時、行き倒れているあなたを見つけたの。すごく驚いた。だって私とそっくりなんですもの。これは神様の贈り物だと思ったわ。それにこれからの身の振り方も決まっていないのでしょうか？ だったらお願い。私の代わりにお父様達の傍にいて」>br< 瞳を潤ませたシンシアは、縋りつくような眼差しをしている。困惑して伯爵夫妻に視線を移すと、ゲルハルトはうつむいて唇を噛み締めており、キナは目頭をハンカチで押えている。

>br<（……全然話が見えないんだけど）>br< 心の中でひっそりと突っ込んでみる。落ち着いて考えてみよう、胸に手を当てる。>br< 今わかるのは、シンシアがこの国の王様の側室になるということだけだ。>br< 王様の側室になるというのは、

そんなに辛いことなのだろうか。側室ということは正室がいるわけ
で……。後宮つて江戸時代の大奥みたいなものなのだろうか。> b
r< 伯爵夫妻もシンシアも、少しもうれしそうではないところを
見ると、逆らうことも許されず、半ば強制的に側室にされてしまう
ということなのだろうか。> b r<「……あの、ひとつ聞いていい
ですか?」> b r< 美桜はおずおずとシンシアに向って手を上げ
た。シンシアが頷いたのを確認してから、ストレートに聞いてみる。
> b r<「王様のことが好きじゃないんですか?」> b r< 美桜の
質問に、シンシアは目を丸くしてしまう。予想外の質問だったよう
だ。> b r<「そうね。まだお会いしたこともないから、何とも言
えないわ。この婚姻に個人的な感情を挟む余地はないのよ」> b r
< 悲しそうに笑うと、シンシアは口をつぐんでしまう。後を引き
継いだのはゲルハルトだった。> b r<「シンシアは人質として、
後宮に入るのだよ。側室というのはあくまで形式上のこと。実際は
丁重に扱われる人質なのさ。我がディディ伯爵家が、グリシアへ
寝返らないための人質なのだよ」> b r< 太腿に両肘をついて、
組んだ手の上に顎をのせ、ゲルハルトは苦々しく呟いた。> b r<
「そんな……。おじ様は、そんなことを考えてないですよね?」> b
r<「もちろんだとも!」> b r< 美桜の問いに、間髪入れずゲ
ルハルトは答える。その激しさに、美桜はびくりと体を震わせた。
> b r<「お父様、落ち着いてください。疑いが晴れば、きつと
家に帰してくださるはず。それまでの辛抱です」> b r< 父親を
宥めると、シンシアは気丈にも微笑んで見せる。> b r< きつと
すごく不安に決まっている。生まれ育った世界が違うとはいえ、シ
ンシアも美桜と同じ年頃なのだ。両親と離れ、例え形だけだとして
も王の側室になるなんて、美桜には考えられなかった。> b r<
娘の気丈な態度を憐れに思ったのか、キイナはついに泣き出してし
まったようで、押し殺した嗚咽が漏れ聞こえてくる。> b r<（お
じ様も、おば様も、すごくいい人なのに。何でこんなことになるん
だろう）> b r< 見ず知らずの自分を親身になって看病してくれ

たし、元の世界に帰る方法だって何とかして調べようと言ってくれた。短い間だけれど、本当の娘のように可愛がってくれたこの人達が悲しむのは嫌だった。悲しませるこの国の王様が憎らしい。>br<「……私が、私が代わりに行きます」>br< ぼろりとそんな台詞が口を衝いてでた。口にだしてみると、それは妙案のように思えた。>br< シンシアと自分はそっくりなのだ。瞳の色が微妙に違うとはいえ、初対面の人間にはきつとわかりはしない。人質として日々を過ごすのなら、大人しく室内で過ごしていればいいはずだ。伯爵夫妻はこんなにもいい人なのだ。疑いだってすぐに晴れるに決まっている。>br<「礼儀作法だっておば様に教えていただきたいし。大人しくしていれば大丈夫ですよ。うん。私お世話になりっ放しで、何か恩返しがしたいって思ってたんです。だから、私に行かせてください」>br< この世界に来て、初めて人の役に立つことができるのだ。世話になった伯爵夫妻を助きたい一心で、美桜は身代りになることを申し出たのだった。>br< 最初はその無謀ともいえる申し出を、思いとどまるよう説得していた伯爵夫妻とシンシアだったが、美桜の粘り強い働きかけにより、渋々納得したのだった。>br<>br< こうして美桜はデイデイエ伯爵令嬢シンシアとして、マイトリイ王国の現国王、デイス「トリア」マイトリイの側室として王都へと向かうことになったのである。>br<

第2章 王の側室（1）

そしてついにその日が来た。シンシア「ディディエが王都マーシエへ向けて旅立つ日だ。」>br< まだ日も昇りきらぬ早朝、王宮からの使者がディディエ伯爵家を訪れていた。>br< ディディエ伯爵夫妻の後ろに控えた美桜は、まるで花嫁衣裳のようなドレスを纏っていた。>br< 飾り気のない長袖のドレス。上質な絹のドレスは王家から贈られたものだ。履き慣れていない白のハイヒールは、立っているだけでもひどく疲れる。手首にリボンがあしらわれたレースの手袋に揃いの髪飾りを右耳の辺りに付けて、肩より少し長い黒髪は、結いもせずそのままにしてある。>br< 綺麗なドレスを着せられ、飾り立てられていても、美桜の心が浮き立つはずもなかった。>br< 使者を出迎えた伯爵夫妻は、それが誰であるかを知ってひどく驚いていた。二人の背後に大人しく控えていた美桜は、夫妻とは違った意味で円い瞳をさらに円くして驚いている。>br< 朝日を背中に従え、淡い光の中に佇むその姿が、あまりにも絵になり過ぎていて、思わず見惚れてしまう。>br< 手足が長く長身で、すらりとした肢体。シンプルな黒の上下を身に着けているだけなのに、意識が引き寄せられる。>br< 鼻筋の通った高い鼻。薄く形のいい唇。男性らしさを誇示する凛々しい眉。特に印象的なのが、切れ長の瞳だ。その色は碧く、見たことのないような色合いだった。>br<（アクアマリン……みたい）>br< 宝石の名を思い浮かべ、美桜は知らず溜息をこぼした。>br< 背中の真ん中くらいまで黒髪を伸ばしているが、それが全く気持ち悪く感じられない。というかむしろ似合い過ぎて困るくらいだ。>br< 黙って立っているだけなのに、格好良すぎる。すごくモテるんだろっとなあ、というのが、彼に対する第一印象だった。>br<「シンシア様をお迎えにあがりました」>br< その彼が口を開く。当然の如く、耳に心地よい美声だった。>br< ちらり、

とこちらに視線を寄越した彼と目が合い、美桜は慌てて視線を落とす。>br< 彼の視界に自分が映っているのかと思うと、何だか無性に恥ずかしい気がした。>br<「……何故サディク様が直々に？」>br< 驚きを隠せない様子で、デイディエ伯爵ゲルハルトが問いかけた。>br< サディク、という名に、美桜はあつと内心で声を上げた。>br< シンシアの身代わりになると決めたあの日から、この国——特に王宮での主要人物について、みっちり教え込まれた美桜である。その中にサディクという名があったのだ。それもかなり重要な立場にある人物である。>br< 彼の名はシオンⅡサディク。マイトリイ王国現国王、デイスⅡトリアⅡマイトリイの幼なじみであり、現在はその右腕として手腕を揮っている人物である。常に国王の傍らにあり、影のように付き従っているという。>br< その彼がどうして、こんな辺境までわざわざやって来たのだろう。美桜も不思議に思うくらいだ、当然デイディエ伯爵もそう思ったのだろう。>br< シオンⅡサディクは何と答えるのだろう。>br< そらした視線を再び彼に注ぐ。シオンはふつと笑みをこぼすと、さも当然とばかりにこう言った。>br< 「デイディエ家のシンシア様は、王の側室となる御方。長旅の間、心安らかに過ごされるようにと、陛下から直々に命を賜ったのです」>br< あからさまな嘘に、美桜は表情を曇らせた。だってそんなわけがない。王の側室というのは方便で、実際はデイディエ伯爵が隣国グリシアへ寝返らないための人質なのだから。>br<「陛下自らが？ ……それは何と御礼申し上げてよいのか、私共には言葉もございません」>br< 伯爵も苦々しく思ったに違いない。だが感情を押し殺し、心にもない礼を述べている。>br<（……何だか嫌だな）>br< 互いに嘘と知りつつ、上辺だけの言葉を交わす。そんな二人を見ていて、美桜はこの世界に来る直前の出来事を思い出していた。>br< いつも可愛らしい笑顔を向けてくれていた友人の、醜く歪んだ顔。吐き捨てられた言葉。>br<「……では、参りましょうか、シンシア様」>br< 胸の痛

みに捕らわれていた美桜は、不意に手を取られひどく驚いた。弾かれたように顔を上げる。>br< 間近にある二粒の宝石に心臓が跳ねた。胸の痛みなどこへやら、シオンの頬笑みに、美桜は体温が上がったことを確信する。だってその証拠に頬がこんなにも熱いのだ。>br< そのままシオンと目を合わせていることなどできなくて、美桜は黙ったままこくりと頷いた。彼の掌の上に乗る、自分の手を見て、子供みたいに小さな手だと思ってしまう。それだけシオンの手が大きいのだろう。大きくて少しごつごつした大人の男性の手。意識してしまうと、またカツと体が熱くなる。>br<（もう、私の馬鹿っ！）>br< しっかりしなくては、と美桜は一度きつく眼を閉じた。>br<（私はシンシア＝ディディエ。王様の側室になるの）>br< だから、いくらシオンが素敵な男性だとしても、目を、心を奪われてはいけない。シオンは王の右腕だ。彼だってディディエ伯爵を疑っているに決まっている。>br< 館の前に連れ出され、そこで手を放される。彼の熱が残る手を意識しながら、美桜は伯爵夫妻に向き直った。>br<「お父様、お母様……行って参ります」>br< 深々と頭を下げる。二人から返る言葉はなかった。美桜が頭を上げると、不意打ちのように抱き締められた。>br<「……おば。……お母様」>br< 温かくて柔らかい。無言で美桜を抱き締めたのは、ディディエ伯爵夫人キイナだった。>br< ゆっくりと頭を撫でってくれる手に、涙が出そうになる。行きたくない。ずっとここにいたい。ついそんな弱音を吐きそうになる。>br< だけど決めたのは自分なのだ。親切にしてくれた伯爵夫妻に恩返しをしたい。>br< 美桜はキイナの腕をすり抜けると、笑顔を作って夫妻を交互に見る。そしてもう一度軽く頭を下げると、シオンを振り返る。>br<「お待ちせしました、サディク様」>br< 真っ直ぐに彼の瞳を見上げる。差し出された手に、自らの手を預け、美桜は馬車へと向かうのだった。>br<

第2章 王の側室（2）

（何で、こんなことになってるの？）>br< 少々、いやかなり居心地の悪い思いをしながら、美桜は途方に暮れていた。>br< 王家の使者シオン＝サデイクが引き連れてきたのは、馬車と四名の騎士達だった。>br< 銀色に輝く甲冑を纏った騎士達は、腰に剣を携え、目元と口元以外を覆う兜を被っている。馬車を引く馬も、騎士達が乗る馬も、毛並みのいい綺麗な白馬だ。馬を間近で見ると、初めてだった美桜は、意外に可愛らしい彼らの瞳に、思わず口元を綻ばせる。>br< 迎えの馬車は二台用意されていて、ひとつは華美な装飾がなされた立派なもので、もうひとつは少し小さめの簡素な馬車だ。>br< 身の回りの世話をしてくれる侍女を、デイデイレ伯爵家からひとり連れて行くことになっていた。だから当然、その侍女と同じ馬車に乗るのだと思った。でも今、美桜の目の前に座っているのは……。>br<「……大丈夫ですか？ 少し休憩を取りましょう」>br< 顔を上げると、そこには美桜を氣遣う、シオン＝サデイクの真摯な瞳があつた。先に美桜を馬車へ乗せ、彼は当然のように同じ馬車へ乗り込んできたのである。>br<「いいえ、大丈夫です。馬車に不慣れなもので、すみません」>br< 揺れる馬車に乗っているのは、案外疲れるものだった。マイトリイ王国の道がアスファルトで舗装されているわけもなく、でこぼこの道は案外揺れが激しい。電車や車だったら、揺れに体を合わせることできる。>br< 申し訳程度に付いている小窓は、分厚いカーテンで閉ざされ、外の景色は見えない。進行方向すらわからない状況で、不規則に揺れる馬車に乗っているのは正直言って辛かった。>br< デイデイレ伯爵邸を出発してすぐ、目の前に座るシオンは王都マーシェまでの行程を説明してくれた。>br< 王都までは馬車で約十四日かかるという。宿泊先や食糧などは、各地に手配済みだそうです。王の側室として後宮に迎えられるシンシ

アのためならばと、各領主はみな喜んで食糧や館を手配してくれたらしい。>br< 常に笑みを絶やさないシオンの話に軽く相槌を打ちながら、何と返答していいものか思案していた。>br< 下手に口を開いて、シンシアでないと知られるようなことはしたくない。伯爵夫妻にかけられた嫌疑が晴れるまでは、何としてもシンシア「ディディエであると思わせていなければならない。」>br<「シンシア様は、随分と大人しい方なのですね？」>br< 殆ど言葉を発しない美桜に、シオンが苦笑した。>br< 首を左右に振りながら、慌てて顔を上げると、リラックスした様子のシオンが目についた。長い脚を組んだシオンは、片肘を腿の上に付き、少し前屈みになって美桜をじつと見つめている。>br< 使者としてディディエ邸を訪れていた時とはまた雰囲気が違う。全て見透かすような、それでいて包み込むような、そんな感じがする。>br< 大人の、それもこんなに素敵な男性に、これほど見つめられた経験など美桜にあるはずもなく、緊張と気恥ずかしさで頭の中が真っ白になる。>br<「あ……あの。私、緊張してて。……だ……ですから、その」>br< もうまともにシオンの顔なんて見てもらえない。シンシアに教え込まれた、伯爵令嬢らしい言葉遣いも怪しくなってくる。>br< 美桜はちらちらと視線を上げ下げし、しどろもどろになりながら、何とか緊張していることを伝えようと、そこで力尽き、思いつき切り横を向いた。>br<（むっ、無理！ そんな顔、反則だよっ！）>br< 優しく細められた瞳が、緩んだ口元が、というか彼の存在自体が反則だ。>br< 顔なんて真っ赤になっっているに違いない。心臓が苦しいくらいに波打っている。そのせいか息苦しくて、浅く、速い呼吸になる。>br<「人づてに聞いていた印象とは、当てにならないものですね。実際見る貴女は、実に可愛らしい方だ」>br< 可愛い、という単語だけ、やけにはつきりと捉えてしまう。>br<「……っ！」>br< 勢いよく振り向いて、美桜はすぐさま後悔した。呼吸をするのも忘れて、見入ってしまう。どくん、と心臓が歓喜の悲鳴を上げる。美

桜の心は簡単に、極上の笑みを浮かべたシオンの瞳に絡め取られてしまったのだった。>br<>br<s>br<>br< それからの美桜は始終伏し目がちだった。一分一秒が、ひどく長く感じられる。シオンと二人きりでいることが、拷問のように思えてしまう。>br< シオンという、素敵な大人の男性をひとり占めにしていく。そういう考え方をすれば、優越感に浸れるところだが、悲しいかな、美桜にそういう発想は皆無だった。>br< ところか一旦意識してしまうと、目も合わせられないという、今時の女子高生にしては珍しいくらいおくてなタイプである。>br<(……: ちよつと、ひとりになりたいな)>br< のぼせた頭を冷やす時間が欲しかった。困ったな、どうしよう、と本気で泣きたくなってきた時、馬車が速度を緩め、程なくして止まった。>br<「ああ、着いたようです。お疲れになったでしょう。昼食も兼ねて、少し休憩しましょう」>br< 言われて初めて、美桜は昼食を取っていないことを思い出した。緊張し過ぎて空腹なんて感じなかったのだ。>br< 先に馬車を降りたシオンが、すつと手を差し出している。躊躇いながら、シオンの掌に自分の手を預ける。思いがけないほど強く握られたことに驚く間もなく、彼の方へ引き寄せられる。>br<「失礼」>br< 耳元でシオンの声が響いたかと思うと、背中に腕が回され、膝の裏をすくわれる。ふわり、と足が宙に浮き、軽々と抱き上げられてしまう。>br<(えーっ！ えええっ?)>br< 声にならない心の叫びを上げているうちに、シオンの手によつて馬車を降ろされてしまった。>br< ハイヒールで踏みしめているのは、柔らかな緑の絨毯だ。太陽の光に目が眩む。空は雲ひとつなく晴れ渡り、清々しい風が吹いている。ひんやりとした風が火照った頬に心地よかった。>br< 気持ちが落ち着いたところで、辺りを見回してみる。緑の絨毯には所々可憐な白い花が咲いていた。そよそよと風に揺れる花弁は、野に咲く花らしく慎ましやかで、美桜は少しだけほつとする。>br< 視線を前方へ転じると、先に着いていたのか、侍女が敷物を広げ、昼食の準備をして

いる。既にそちらへ歩き出しているシオンの背中を追いかけて、美桜は転ばないように注意しながら歩き出した。>br<>br<s
>br<>br<「あの……あの方達は？」>br< あらかた食べ終えたところで、美桜はどうしても気になって、馬車の方を見る。>br< 誰も乗っていない馬車を護るように、四人の騎士達は佇んでいた。美桜とシオンが食事をしている間、ずっと直立不動だった。>br<「それに、あなたも」>br< そう言って、傍らに控える侍女を見る。給仕をしてくれた彼女も、食べ物をお口にしている。>br< それだけでシオンは美桜の言いたいことを察したのだろっ、ああ、と頷き、不思議そうな顔をする。>br<「不可解なことを仰る。あの者達とこの者が、シンシア様と同じ食事の席に付くことなど、有り得ないこと。そもそも身分が違っでしょう？」>br< 甲冑で身を覆った騎士達と侍女を交互に見やる。>br<「……え、ええ、そうでした」>br< 失言にうろたえた美桜は、ついディディエ家の侍女を見てしまう。>br< 彼女は美桜に向かって微かに顔をしかめただけで、まるで置物か何かのように身動きせずに控えている。この侍女は、ただの世話役などではなく、美桜が失敗を犯さないように、何くれとなく助言するための役割も担う予定だったのだ。>br<（ど、どうしよう。偽物だって、ばれたりしていないよね）>br< まさか、こんなに早くぼろがでてしまうなんて。全くもって自分の考えの浅はかさに涙が出そうになる。頼みの侍女は知らぬ顔をしているばかりだ。>br<「シンシア様は、下々の者にもお優しいのですね。そのお優しさ、ディスプレイもお気に召すでしょう。私が保証いたします」>br< びくびくしていた美桜は、思いがけない言葉に瞬いた。>br<「え、あ、ありがとうございます」>br< 取りあえず、礼を述べておく。ばれなくてよかった、と胸を撫で下ろす美桜だった。>br<

第2章 王の側室（3）

それから旅は続いた。>br< シオンはというと、時には美桜の馬車に同乗し、単純に面白い話を提供してくれたり、それとなく後宮の様子を話してくれたりした。>br< また時には、連れてきていた白馬に跨またがって馬車と並走し、景色のよい場所や、珍しい野生の草花が咲き乱れている場所に差しかけると、馬車の窓を叩き、カーテンを開けるように促してくれるのだった。>br< 旅の途中、その土地の領主の別荘などに宿泊させてもらうことになっていた。宿泊先の領主やその家族と晚餐を共にすることになるだろうと思ひ、美桜は密かに不安に思っていた。だが、一度もそういう状況に置かれることはなく、いつもシオンと二人きりだった。>br<

最初は不思議に思った美桜だが、シオンの話からすると、王の側室となる女性を無闇に人目に――特に王以外の男性に――晒すわけにはいかないらしい。>br< そういう風習（？）もあって、美桜は誰の目にも触れることなく、王都マーシエへと迎え入れられることになっていた。>br< 人質の身代わり、ということもあって、シオンに対しても警戒していた美桜だが、彼と接しているうちに次第に態度も和らいでいった。>br<>br< 『長旅の間、心安らかに過ごされるようにと、陛下から直々に命を賜たまわったのです』

>br<>br< デイディエ伯爵邸を訪れた際、彼が言った言葉だ。あの時は上辺だけの言葉だと思っていた。でも今は少しだけ違う。今では彼の心からの言葉だったと思えるのだ。>br< この旅の間中、彼と一緒にいてくれたおかげで退屈しないですんだ。それにこの国、マイトリイ王国のことも少しだけ知ることができた。何より、沈みがちになる心が励まされたのだ。>br< 旅にも慣れ、シオンといえることにも慣れてくると、元の世界に帰れるだろうかと、そればかりが気になった。早く帰りたい。心配しているだろう母を安心させたい。自分が向こうでどういう扱いになっているか

と考えると、悪いことばかりが浮かんでしまう。>br< でもシオンがいたから、彼が楽しい話をしてくれ、綺麗な景色を見せてくれたから、だから考え込む時間はほんのわずかですんだのだ。>br< 王様の片腕というのは、やっぱりすごいんだな、と美桜は素直に感心していたのだった。>br<>br<s>br<>br<そしてついに美桜は王都マーシェに到着した。>br< 堅牢な石壁に囲まれた王宮は、左右対称の造りになっている。右側の建物には王の執務室や私室があり、左側の建物には遠方からの客人をもてなす部屋がある。そして中央には謁見の間や、大広間などがあるのだった。>br< 美桜が住むことになる後宮は、王宮の正面からは見えない位置にあった。そこに住まうのは国王の母や妃達、そして子供らである。現国王デイス「トリア」マイトリイの母は、彼が幼い頃に亡くなっており、子はまだない。従って現在彼の後宮に住まうのは、彼の側室達であつた。そして今日、美桜もその中のひとりに名を連ねることになるのだ。>br< 美桜が乗った馬車は、精巧に組み上げられた石壁の城壁沿いに進み、王宮の裏側にたどり着いた。>br< 王宮の裏側には緑が目にも鮮やかな森林が広がっており、その先には高い山々がそびえている。広大な森林では、しばしば狩りも催されているそうだ。>br< 王宮の裏側にある城門は後宮専用の門だ。門の内側には兵の詰所があり、常時複数人が警護にあたっている。>br< 兵達はシオンの姿を認めると、すつと背筋を伸ばし、軽く頭を下げた。美桜はシオンに先導され、後宮へと足を踏み入れた。>br< 永遠に続くのではないかと思うほど、長い廊下を歩く。これから王に目通りするのだという。シオンの広い背中を見つめながら、ただ黙々と足を進めていると、否が応でも緊張してきた。どくどくと、高鳴る鼓動に息苦しくなる。>br<（王様つて、どんな人なんだろう）>br< 本物のシニアさえ会ったことのない人だ。どう振舞えば関心を引かずに済むのだろう。>br< 王の機嫌を損ねず、なおかつ変に興味を持たれないようにすること。>br< シンシアから言われたことを頭

の中でなぞる。>br< 前を歩くシオンが、大きな扉の前で足を止めた。くるりと美桜を振り返り、涼しげな目元を細めて勇気づけるように微笑んでくれる。>br< そんなシオンに答えようと、美桜はぎこちなく微笑んだ。>br<「では、参りますよ。よろしいですね?」>br< 緊張した面持ちの美桜を氣遣ってか、シオンが一呼吸置いてくれた。>br< からからに乾いた唇を舐め、美桜はきゅっと口元に力を入れる。シオンの瞳を真っ直ぐ見返すところりとひとつ頷いた。>br< 天井に吊り下げられた眩いばかりに煌めくシャンデリア。重厚なビロードのカーテンは血を吸ったような深紅。敷き詰められた絨毯には見たこともないような図柄が織り込まれている。>br<「……?」>br< 開け放たれた扉の先、広い室内に足を踏み入れた美桜は首を傾げた。>br< 飴色をした、長方形のやけに長いテーブルが中央に置かれており、少なくとも二十以上の椅子が並べられている。テーブルの右端には豪華な装飾が施された椅子があり、きつと偉い人が座る場所なんだろうと、美桜は見当をつける。>br< がらんとした室内に人の氣配はない。もちろん王らしき人物の影も形もなかった。>br<「……困りましたね。こちらにお通しするよう申し付けられていたのですが」>br< シオンも何も聞かされていなかったのか、困惑したように室内を見回している。>br<「あの、何か急な御用でもおありになったのでは?」>br< おずおずとこの状況をフォロ―してみる。シオンの困っている顔など見るのは初めてで、それだけに何とかしてあげたくなってしまったのだ。>br<「いえそれは……。ああ、そうかも知れませんか。では取りあえず、部屋に案内させましょう。しばらくお待ちください」>br< 美桜の言葉を否定しかけたシオンだったが、思い直したように同意すると、さつと表情を切り替えた。椅子を引いて美桜に座るよう促すと、身を翻し足早に部屋を出て行った。しばらくしてシオンはひとりの女性を伴って戻ってきた。>br<「この後宮でシンシア様のお世話を担当する侍女です。ご不便なことがありましたら、この者にお

申し付けください」> b r < 黒の簡素なドレスを纏った年配の女性
性が、美桜に向かって一礼する。ディディエ家から連れてきた侍女
がいるのに、どうしてまた新しい侍女が付くのだろう。そういえば
連れて来た侍女はどうしているのか。> b r < 「あ、あの。私の侍
女は？」> b r < 不思議に思った美桜は、すぐさまシオンに尋ね
てみた。彼は表情を曇らせると、気の毒そうな眼差しを美桜に向け
た。> b r < 「申し訳ありません、シンシア様。あの者はディディ
エ伯爵領へ帰らせました」> b r < 「……え？」> b r < 予想外
の答えに、美桜は瞳を見開いた。断りもなく帰らせてしまったとい
う事実には打ちのめされる。あの侍女なしで、これからどうやってこ
の後宮で日々を過ごせばいいのだろう。> b r < 「誠に心苦しいの
ですが、しきたりにより他家の侍女をこの後宮内へ入れることは禁
じられているのです」> b r < 茫然とする美桜を苦しげに見つめ
ると、彼は王家の慣習だと告げた。> b r < 「そう、なのですか？」
> b r < 初耳だった。ディディエ伯爵夫妻もシンシアも、知らな
かったに違いない。知っていれば、もっと別の対策を考えてくれた
はずだ。> b r < 心細さは募るが、どうすることもできない。>
b r < (大丈夫。ほんの少しの間なんだから)> b r < 美桜はそ
う自分に言い聞かせると、笑ってみせた。> b r < > b r < 共に
旅をした数日間で、美桜はすっかりシオンのことを信用していた。
それに美桜はこの世界の住人ではない。だから何も気付けなかった。
> b r < 誰にも会わず、ここまで連れてこられたこと。> b r <
王が姿を現さなかったこと。> b r < 断りもなしに侍女を送り
返されていたこと。> b r < それらがどんなに不自然なことか、
美桜にはわかるはずもなかった。> b r <

第2章 王の側室（4）

「部屋に閉じこもってばかりでは、気が滅入るでしょう。少し外の空気を吸いませんか？」>br< それは後宮入りしてから五日経った、よく晴れた昼下がりのことだった。後宮にある美桜の部屋を訪れたシオンによって、外へと連れ出されたのだった。>br< あれから――後宮入りしてから――美桜は部屋に引きこもっていた。別に誰かに何かを言われたからではない。ただ何となく、じっとしている方がいいと思ったからだ。この後宮には、美桜の他にも王の側室が暮らしている。その辺をうろろろして、側室の誰かと会ったりしたら……。そう思うと、怖くて動けなかったのだ。>br< だってその中の誰かが、本物のシンシアを見たことがあったなら、身代わりだと気付かれてしまうかも知れない。顔形が瓜二つだとしても、やはり身のこなしや話し方は違う。異なる環境で育ったのだ、見る者が見れば、すぐに見破られてしまうだろう。>br< 「ディディエ家のシンシア様は、息を潜めるようにして日々を過ごしていらっしゃると、侍女が案じていましたよ」>br< 柔らかな日差しの下、シオンが苦笑している。数日振りに会う彼は、やはり美しい。ただそこに立っているだけなのに、はっとするほど目を引くのだ。>br< 今日だって、黒のズボンに白いシャツという、何てことはない格好なのに、こうして目を奪われている。>br< 着飾っている自分が猛烈に恥ずかしくなる。侍女がどんなに腕を振ってくれたとしても、シオンと並ぶとどうしても見劣りしてしまう。>br< そんなどうでもいいようなことを考えていると、シオンの気遣わしげな視線が、自分に注がれていることに遅ればせながら気付く。>br< 「やはり、デイス様のこと、お心を痛めておられるんですね」>br< 「……え？」>br< 探るように瞳をのぞき込まれ美桜は驚いて瞼を伏せる。>br< どうしてここで王の名が出てくるのだろう。美桜が小首を傾げると、しやらしや

らと耳元で金属が触れ合う音がした。> b r < 小さな真珠を金の鎖で繋いだ、清楚で品のいい耳飾りが奏でた音色だ。王からの贈り物だと侍女が言っていた。手首と首にも王から贈られた、腕輪と首飾りを付けている。> b r < 「デイスも、いえ王もシンシア様のことは、気になさってはいるのです。ですが執務に追われ、なかなかシンシア様の元を訪れる時間が持てない有り様で。今日は王に頼まれて、私がご機嫌うかがいに参ったのです」> b r < 頭に上つていた血が、すうつと下がる。> b r < 今、彼は何と言った？> b r < 王に頼まれたから、様子を見に来たと言わなかったか。> b r < 何だ、そういうことかと、美桜の胸に苦いものが広がる。> b r < 自分が何を期待していたのか思い知らされてうるたえた。彼の前だと、どうしても冷静でいられない。よく考えれば王の側室である自分に、彼が個人的に会いに来るわけがないとわかるのに。> b r < (ばか、みたい)> b r < どきどきしていた自分が情けない。> b r < 「私は大丈夫です。サディク様を煩^{わづら}わせるようなことになってしまって……申し訳ありません」> b r < 苦笑いしながら、シオンに向かって頭を下げる。結っていない髪が、ばさりと音を立てて頬にかかった。> b r < 「……シオンと。どうか私のことはシオンとお呼びください」> b r < つと、美桜の乱れた髪に指を伸ばしかけ、触れる寸前で手を下ろす。アクアマリンの瞳が揺れているような気がするの、思い違いだろうか。> b r < 「シオン、様？」> b r < 躊躇いながらも、シオンの名を口にのせる。> b r < 男性の名字ではなく名前を呼ぶのは初めてで、何となく気恥ずかしい。例えこの国に、たいして親しくなくても、名前で呼び合う習慣があるのだとしても。> b r < 名を呼ぶと、シオンは微かに微笑んでくれた。夢のように儚い微笑みに、美桜の胸は締め付けられる。王から贈られた装飾品が、ひどく重く感じられた。> b r < > b r < シオンと別れ、部屋に戻った美桜はぼんやりと物思いにふけていた。> b r < 後宮に入ってから、王には一度も会っていない。それを気に病んではいなかったが、どうやら周囲は

そう思っていないらしい。>br< 側室とはいえ、それは便宜上のことで、実際は人質なのだ。別に会う必要はないだろう。というか、できれば会わずに済ませたい。>br<（それにしても、退屈だな）>br< テレビもゲームもなく、携帯だつて使えない。もちろん雑誌や漫画もない。毎日暇を持て余していた。>br< 明日は思い切つて、ひとりで散歩でもしてみようかな>br< のんびりとそんなことを考えていられたのも、夜までだった。>br<<br<

s>br<>br< 夕食を済ませ、侍女に淹れてもらったお茶を飲んでいると、いきなり数名の見知らぬ侍女達が部屋に入ってきた。>br<「……な、何ですか」>br< 張り詰めた空気を漂わせる彼女らに、美桜は目を円くする。もう少しで、手にしているティーカップを落としてしまうところだった。>br<「今宵、王がいでになります。お迎えするお支度を」>br< 抑揚のない事務的な口調で、年嵩の侍女が言った。それを合図に他の侍女達が動き出す。>br<「あ、あの。どういう……」>br< 手を取られ、どこかに連れて行かれそうになる。不安にかられて視線をさまよわせても、誰ひとりとして答えてくれない。>br< あ、とか、とか口ごもっているうちに、侍女達に囲まれ、部屋から連れ出されてしまった。>br< 連れて行かれた先は風呂場だった。いつもは部屋に備え付けてある陶器の浴槽に、わずかな湯を張つてもらい、そこで体を清めていた。>br< だが初めて目にする風呂場は、まるで旅館の大浴場のように広い。しかも並々と湯が張つてあり、湯気がもうもうと立ち込めている。呆気に取られていると、侍女達が衣服に手を伸ばしてきた。>br<「え……ちょ、っと」>br< 抵抗する間もなく、あれよあれよという間に脱がされてしまう。妙に慣れた手付きの侍女達に、あつという間に一糸纏わぬ姿にされてしまった。>br< 死ぬほど恥ずかしいけれど、美桜は体を縮めてうつむくしかできない。背中を押され、風呂場に移動させられる。強引に椅子に座らされ、両手を泡だらけにした侍女が

体に触れてきた。>br<「や、やめて！ 自分でするから！」>br< 他人の手に撫で回され、美桜は悲鳴を上げた。けれど侍女達は表情を変えることなく、淡々と美桜の体を洗うという作業を続けている。>br< 抵抗するだけ無駄だと悟った美桜は、きゅつと唇を噛んで羞恥に耐えた。>br< 泡だらけにされてごしごしと擦られあと、しばらく湯船につかり、湯から上がると丁寧に体を拭いてもらった。ようやく解放されたと思ったのも束の間、いい香りのするクリームを全身に擦り込まれた。>br< バスローブのような物を羽織られ、部屋まで戻る。用意されていた夜着を侍女が広げた。その夜着を目にした美桜は、ぎよつとして瞳を見開いた。>br<（……シースルー？）>br< 純白の夜着は、どう見ても薄すぎる。固まっていると、バスローブを脱がされ、薄物の夜着を纏わされた。>br<「間もなく王がおいでになられます。寝台でお待ちくださいますよう」>br< 呆然とする美桜の背中に、落ち着いた侍女の声がかけられた。>br< 焦って振り返った美桜の目に、部屋の扉が閉まっていくのが見えた。>br<「ま、待つて！」>br< 慌てて扉の取っ手をつかむ。どんなに開けようとしても、扉はびくともしない。>br<「……う、そ。なに、これ？」>br< 目の前が真っ白になる。この格好に、状況。嫌でも想像がつく。>br<「どうしよう」>br< どこか隠れる場所がないか、ざつと視線を走らせる。でも、隠れられそうな場所などあるはずもない。この後自分を待ち受ける事態を考えると、体に震えが走った。>br< 側室だというのは建前ではなかったのか。それとも、人質だろうか側室だろうか、女であれば誰でもいいのだろうか。>br<（……汚らしい）>br< 見境のない王を嫌悪して、心の中で毒づく。>br< 必死に王への怒りを駆り立てて、じわじわと沸き上がる恐怖から目を逸らそうとする。>br< もしシンシアではないと、身代わりだと打ち明けたなら、許されるのだろうか。でもそうしたらデイディ伯爵親子が咎められてしまう。>br< どうしよう。どうしよう。どうすればいい？

> b r < 上手い言い逃れや、方法はないものかと、震える体を抱き締めて考える。> b r < 「王のご到着です」> b r < 固く閉ざされた扉の向こうで、侍女が声を張り上げた。> b r < びくりと痙攣のように全身が激しく震える。血の気の引いた顔を強張らせ、美桜は小走りにベッドへと向かう。シーツを引き剥がすと、露になっっている体を隠すようにぐるぐると巻き付けた。> b r < 間接照明のように灯されたランプの明かりの下で、恐怖に瞳を見開いて、ゆっくりと開いていく扉を見つめる。> b r < 廊下の明かりを背負った王が姿を現した。> b r < 「デイディエ伯爵の娘、シンシアとはおまえか？」> b r < 凍てついた声音に、肌が粟立つ。> b r < 漆黒の上下を纏う立ち姿は、しなやかな獣を思わせる。冬の夜空に瞬く星の光を集めたような、長い銀の髪。硬質な印象を与え、る碧眼。夢見るように美しいその容貌。> b r < だがシオンに感じるような柔らかさや甘さは一切ない。鍛え上げられた鋼のごとき強さに、美桜は圧倒される。> b r < ごくり、と唾を飲み込んだとき、再び扉が固く閉ざされた。> b r <

第2章 王の側室 (5)

ゆったりとした足取りで、王が近付いてくる。体に巻き付けたシートをきつく握り、無意識の内に一步二歩と後ろに下がる。だがすぐに膝の裏がベッドに当たり、美桜の意志とは関係なく、かくんと膝が折れた。図らずもベッドの端に腰を降ろす格好になってしまう。

> b r < そうこうしているうちにも、王は確実に距離を詰めてくる。冷たく光る碧眼から視線を逸らすこともできず、為す術もなく震えているしかなかった。> b r < 綺麗な長い人差し指が伸びてきたかと思うと、つい、と顎を持ち上げられ、上を向かされる。> b r < 「何をそんなに怯えている？ 私の子を孕むまたとない好機だろうに」> b r < 口の端を吊り上げて、嘲るように笑う。> b r < あからさまな台詞に、美桜の頬がかつと熱を帯びた。何か言い返さないと、と萎縮した心を懸命に奮い立たせる。> b r < 「……っ！」> b r < 美桜は悲鳴を飲み込んだ。反論しようと口を開きかけたとき、ベッドの上に押し倒されたのだ。> b r < 反射的に起き上がるうとするが、覆い被さっている王のせいで体の自由が利かない。恐慌状態に陥った美桜は、僅かばかり自由になる両手を死に物狂いに動かした。> b r < だが決死の抵抗も、呆気なくねじ伏せられてしまう。容易く両手をつかまれ、強引に頭の上へ持ち上げられた。そして片手一本で押さえ付けられる。> b r < 「な、何を……」> b r < 心臓が破裂するのではないかと思うほど、滅茶苦茶に暴れている。荒い息をつきながら、美桜は瞳を見開いた。

> b r < 間近に王の整った容貌がある。氷のような眼差しが、もかく美桜を冷徹に見下ろしていた。> b r < 王の体温が布越しに伝わってくる。美桜は唯一自由になる首を、激しく左右に振った。

> b r < 「……や。い……いやあっ！」> b r < 叫んでも無駄だと、誰も助けにこないと、わかつている。けれど叫ばずにはいられなかった。> b r < 「……真実を話せ」> b r < 湿った吐息が耳

を掠めた。美桜はぴたりと動きを止め、恐怖に彩られた眼差しを王へ向ける。>br<「おまえ達の目的は何だ？」>br< すうつと細められた碧眼に、つい本当のことを話しそうになる。けれど伯爵夫妻の優しい笑顔を思い出し、美桜は震えながらゆっくり首を横に振った。>br<「し……知らない。知らない」>br< うわ言のように、知らない、という台詞を繰り返す。>br< 本当のことを言ってしまう。>br< 言えば酷い目に遭わずに済む。>br< たった数日世話になっただけではないか。>br< 自分を犠牲にしてまで、彼らを守る必要があるのだろうか？>br< そんな悪魔の囁きが次々と聞こえてくる。>br< けれど……けれどできない。身代わりを言い出したのは自分なのだ。ここで投げ出してしまうば、きつと自分で自分を許せない。>br<「強情な……ならばその体に聞くまでのこと」>br< 舌打ちをしながら再び王が覆い被さってくる。>br< 美桜は条件反射のように瞼を閉ざし、顔を背けた。無防備な首筋に、生暖かいモノが触れる。>br<「ひつ……」>br< 首筋をきつく吸われ、美桜は体を強張らせた。>br<（誰か助けて。……誰か）>br< わななく唇を血が滲むほど噛み、心の中で叫ぶ。今まで堪えていたものが堰を切ったように溢れだす。>br< 固く閉ざした瞳から、透明な雫が零れ落ちた。涙は後から後から止め処なく溢れ、頬を伝いシツに染みを作る。>br<「デイス！これはやり過ぎです！」>br< 不意に聞き覚えのある声が、王の名を呼んだ。焦りを含んだその声は、王の右腕と称されるシオン「サディク」のものだ。>br< シオンの声がしたのと同時に、体にかかる重みが消える。涙でぐちゃぐちゃになった顔を拭い、美桜は驚くほどの速さで跳ね起きた。ベッドの上に飛び乗り、少しでも王から離れようとする。>br<「……何だ、シオンか」>br< ここは後宮。王の側室の部屋。それも夜。こんな時間にシオンがやって来たことを、王は少しも不自然だと思っていないようである。>br<「何だ、ではありません。彼女は何も知らないと、申し上げたはず。それなのに

どうしてこんな乱暴なことをするのです」>br< 王の片腕をつかみ、美桜から引き離す。色素の薄い瞳に憐れみの色が浮かぶ。>br<「大丈夫、ですか？」>br< ベッドの隅で小さくなっていた美桜は、シオンの声に反応し、涙に濡れた瞳を向けた。>br< 二人の視線がかち合う。美桜は近寄って来ようとするシオンに鋭く叫んだ。>br<「こ、来ないでっ！」>br< 拒絶の言葉を投げつけたというのに、シオンは怯まない。それどころかベッドに上がってくる。強引に手を取られ、腕の中に抱き締められた。>br<「……や。やだ。離して！ い、いやあっ！」>br< つかいさつき、王に組み敷かれた感覚が甦り、髪を振り乱し滅茶苦茶に抵抗する。>br<「シオンです。落ち着いて。大丈夫。もう大丈夫ですよ。これ以上デイスには指一本触れさせませんから」>br< 息ができないくらい、しっかりと抱き締められた。大きな手が何度も頭を撫でる。耳元で優しく、根気よく囁かれ、美桜は次第に落ち着きを取り戻した。>br< シオンの体温を感じながら、規則正しい鼓動を聞いていると、少しは物事を考えられるようになってくる。>br<（助かったのかな？）>br< 何がどうなったのかわからないが、ともかくシオンに助けられたようだ、美桜は安堵した。突っ張っていた体からようやく力が抜ける。>br<「デイス、彼女に着替えると、何か温かいものを、……ああ、甘い飲み物がいいでしょう」>br< シオンの言葉に、美桜ははつとした。そういえば着ている夜着はシースルーだった。シーツを巻き付けて隠してはいるけれど、とんでもなく恥ずかしい格好だ。意識すると顔から火がでそうなくらい熱くなる。>br<「……？ おまえが用意すればいいだろう」>br< 不満たっぷりな王に、シオンが深いため息で答える。>br<「少しの間だけ、デイスと、王と二人きりになってしまいますが、構いませんか？」>br< 不意に話を振られ、美桜はびくりと体を震わせた。>br<（やだ。絶対やだ）>br< また何かされたらと思うと、到底領ける話ではなかった。怯えた眼差しでシオンを見上げ、ふるふると首を横に振る。

> b r < 「嫌だそうですよ。まあ、仕方ありませんね。自業自得です」> b r < シオンは背中を向けたまま、首を捻って王を振り仰いでいる。> b r < 「……くっ」> b r < 言い返す言葉もないのだろう、王は呻き声を漏らし、足早に部屋を出ていった。> b r < 王が調達してきた衣服（ごく普通のシンプルなドレス）に着替えると、気持ちも一段と落ち着いていた。> b r < シオンから手渡された紅茶を（これも王が持ってきた）ひと口啜る。砂糖がたつぷり入っているのだろう、ひどく甘い。だが今はその甘さに、体の強張りがほぐされるようだった。> b r < 部屋にある二脚の椅子には美桜とシオンが腰掛け、何故だか王であるデイスが立たされている。

> b r < 「貴女はデイデイ工家のシンシアではありませんね？」> b r < 柔らかい声で確かめるようにシオンが尋ねた。美桜は複雑な表情で、シオンの宝石のような瞳を見つめ返す。> b r < この期に及んで沈黙を貫く美桜に、シオンは苦笑している。デイスはいえ、二人から離れた場所で、壁に背中を預け、刺すような視線を向けていた。> b r < 「もう、わかつていますですよ。デイデイ工家の侍女が、全て話してくれました」> b r < 伯爵家へ帰されたはずの侍女が、美桜が身代わりだということを話してしまったというのか。明かされた事実に愕然とする。> b r < 「何も案じることはありません。どうして貴女がシンシアとして後宮にやってきたのか、その訳を話してください。貴女の本当の名前は？」> b r < 美桜は覚悟を決めて、ようやく重い口を開いた。> b r < 「……私の名前は美桜です。小早川 美桜と言います」> b r < 信じてもらえるかわかりませんが。> b r < そう前置きをして、美桜は語り始めた。この世界に迷い込んでしまった日から、今日までのことを。> b r <

第2章 王の側室 (6)

美桜が全てを話し終えると、部屋は沈黙に包まれた。>br<
この世界の人間ではないという突拍子もない話を、すんなりと信じ
てくれるはずはないと思う。だけど美桜にはそれが全てで、話せる
のはそれくらいしかない。>br< ぎゅっと両手を握り締め、王
とシオンの様子をうかがう。シオンは難しい顔をしていた。片手で
口元を覆い、伏し目がちに考え込んでいるようだ。>br< (シオ
ンさんに信じてもらえないのは、少し悲しいかも)>br< ちく
り、と胸が痛む。お願い信じて、と心の底から祈る。>br<「ば
かばかしい。嘘をつくなら、もっとそれらしい嘘をつけばいいもの
を」>br< 冷やかな声音に、美桜は表情を強張らせた。離れ
た場所で吐き捨てられた台詞だというのに、何故か耳元で囁かれた
ように感じてしまう。>br< びくり、と体を震わせて、美桜は
声の主——王——を見た。侮蔑も露な視線に射抜かれて、心臓が跳
ねる。王に信じてもらおうなどと、微塵も考えていなかった。>b
r< 身代わりだと知っていてなお、あのような行為に及んだ人間
だ。シオンが助けに来てくれなかったら、今頃どうなっていたかわ
からない。例え謝ってくれたとしても、すんなりと許せそうにない
>br< (嘘なんてついてない。私は何も悪くない)>br< 萎
縮しそうになる心を奮い立たせ、美桜は瞳に力を込めて王を見つめ
返した。>br<「……にわかには信じがたい話ですが、彼女が嘘
をついているとは思えません。何か証になるものでもあればいいの
ですが」>br< 嘘だと決めつけている王をやんわりとたしなめ、
シオンは困ったように微笑んだ。>br< 別世界——異世界から
来たと証明できるもの。シオンの言葉を聞いて、美桜の頭に閃くも
のがあった。>br<「……携帯」>br< 思わず言葉が零れる。
携帯と制服。こちらの世界に来たとき、美桜が身につけていたもの
だ。>br< このマイトリイ王国で目にした衣服は、どれも裾が

長く、引き摺るようなものばかりだ。制服のスカートのように膝丈のものなど見たことがない。だが残念なことに、制服はディディエ伯爵邸に置いてきてしまった。かさばるし、誰かに見つかったら面倒なことになると思ったからだ。それに直ぐに帰れると思っていたというのもある。>br<(どうなるんだろう、私)>br<ふとそう思う。元の世界に戻る方法が見つかるまで、この世界で生きて行かなければならない。たったひとりで、どうやって生きて行けばいいのだろう。>br<頼りにしていたディディエ伯爵夫妻も、この先どうなるかわからない。彼らのことも心配だが、自分のこれからも見通しが立たず、たまらなく心細い。>br<「ミオ。……ミオ、どうしました？ 具合でも悪いのですか？」>br<はっとして顔を上げる。すると心配そうにこちらをのぞき込んでくる、シオンの憂いを帯びた瞳にぶつかった。>br<「あ、いえ。大丈夫です」>br<綺麗な瞳に見つめられて、そんな場合ではないというのに胸が騒ぐ。あたふたと、何だか無意味に焦りつつ、携帯を取りに行こうと立ち上がった。>br<「どこへ行くつもりだ？」>br<一歩足を踏み出した途端、鋭い声に打たれて足がすくんだ。もたれていた壁から離れ、王が険しい瞳を向けてくる。>br<「携帯を取るだけです」>br<どこまでも疑り深い王に嫌気がさす。立派な成人男性二人に見張られていて、一体どこへ行けるというのか。出入口の扉にたどり着くには、シオンと王の横を通らなければならぬのだ。>br<ついぶつきら棒な口調になる。うつかり、声に感情をのせてしまったのだ。王様相手に、何てことをしてしまったのだろう。国で一番偉い人なのだから、皆馬鹿みたいに丁寧な態度で、心にもないお世辞なんかを浴びせてるはずなのだ。>br<(まずい。どどど……どうしよう)>br<無礼な態度だと責められる。わきの下に嫌な汗がじわりとにじんだ。びくびくしながら、王の様子をうかがうが、意外にも怒ってはいないようだった。ほっと胸を撫で下ろし、そそくさと行動を再開する。>br<衣装がしまわれているクローゼットのようなものの中に、

美桜は体を滑り込ませた。やたらに広い空間に、びつしりと吊り下げられたドレス達。これらが全て王がシンシアのために用意させたものだと思うと、何だか複雑だ。衣装の波をかき分けて、美桜は目的の物を探す。隠していた携帯を手にとると、クローゼットを出た。

>br< 夜の闇を照らすのは、月明かりとランプだ。この世界に電気というものは、まだ発明されていないようだった。だから当然機械なんて未発達で、ましてや携帯なんてあるはずがない。>br< こちらに来る前から、電源は切っていた。あまり思い出したくはないけれど、友達だと思っていた人間の手酷い仕打ちに、すっかり打ちのめされていたのだ。>br< 携帯の電源が入っていると、小さな機械の向こう側ある無限の世界と繋がっているような気がする。友達、親、知らない誰かと繋がっている。だからひとりぼっちじゃないと思えたのだ。けれどあの時は、ひとりになりたかった。全ての繋がりを断ち切って、ただ静かに傷を癒したかった。傷を追った獣が、体を丸めて癒すように、美桜にも心の整理をする時間が必要だったのだ。>br< 圏外に決まっているから通話は無理だと思うけど、カメラで写真でも撮れば納得してくれるだろう。そう考えながら電源を入れる。ランプの柔らかな光の中、目が痛くなるような白い光がディスプレイから溢れた。カメラを起動しようとしてふと気付く。新着メールを知らせるアイコンが表示されていた。習慣からか深く考えることもなく、新着メールを開いた美桜は瞳を見開いた。自分の迂闊さを呪いたくなる。>br<『キモイキモイキモイキモイ……』>br<『ウザイウザイウザイ……』>br<『消える消える消える消える……』>br< 三通のメールに目を通した美桜は、自分の顔が歪むのを止められなかった。>br< 届いたメールはまだ幾通もある。何が書いてあるのか、もう見なくてもわかった。>br< わなわなと震え始めた手を、不意につかまれた。軽いショック状態のまま、呆然として自分の手をつかむその大きな手を見つめる。>br<「これが証か？」>br< 手をつかんだのは王だった。いつの間にかそばに来ていたらしい。

> b r < 王の押し殺した声を聞いても、あまり恐怖を感じない。
それどころか意外に温かい手の感触にほっとする。 > b r < 声を
絞り出す力さえ奪われてしまったようで、王の言葉を肯定しようと
首を縦に振る。 > b r < あっ、と思ったときにはもう遅かった。
美桜の手の中にあつた携帯が、今は王の手の中に収まっている。 >
b r < 「……か、返してくださいっ」 > b r < 焦るあまり、相手
が王であることも忘れて、つかみかかる。携帯を取り返さないと。
美桜の頭にはそれしかなかったのだ。 > b r < (あんなの、絶対に
見られたくないっ！) > b r < メールはまだ開いたままだ。デ
スプレイには、美桜を貶める言葉が羅列されている。そんなものを
人に見られたら、余計に惨めな気持ちになるだけだ。 > b r < だ
から美桜は泣きそうな顔をして、王の手の中にある携帯に手を伸ば
す。 > b r < 「ふん。これが“ケイタイ”というものか。確かに見
たことのない代物だな」 > b r < 背の高い王は携帯を高く掲げ、
ひよいひよいと美桜の手をかわす。 > b r < 「……？ これは文字
なのか？」 > b r < すつと目を細め、光量の落ちたディスプレイ
に見入っていた王が疑問を口にした。 > b r < 「そう、です」 > b
r < 涙目になっていた美桜は、諦めの境地で返答する。 > b r <
「何と記されてあるのだ？」 > b r < 首を捻りながら吐き出され
た台詞に、美桜は一瞬言葉を失った。 > b r < どうも文字が読め
ないみたいだ。日本語だから読めないのか、理由ははっきりわから
ない。けれどメールの内容を知られずに済んだのだ。 > b r < 美
桜は肩に入っていた力を抜くと、王に気付かれないように小さく息
をついた。 > b r < 「別に……何も。ただのあいさつです。元気に
しているかって」 > b r < そして当たり障りのないような内容を
口にした。美桜の言葉を信じたのかどうか、王は「ほう」とだけ言
うと、携帯を手にしたまま踵を返した。 > b r < 「ちょ、あの、そ
れを返してください」 > b r < 近寄りがたいオーラを放つ背中に、
無駄だと思いながら懇願してみる。 > b r < 「これは預かっておく
……後のことは頼んだぞ、シオン」 > b r < ちらりと美桜を振り

返った王は、予想通りの返答を残し、あつという間にいなくなってしまった。>br<「……え!？」>br< 困惑しながらシオンを見ると、彼もまた苦笑いしていた。>br<「今日は大変だつでしょう。ゆつくり体を休めてください。これからのことは、心配しないで。悪いようにはしませんから」>br< 体を屈め同じ目線で、シオンが安心させようと笑いかけてくれる。>br<「は、い」>br< 言いたいことがたくさんあるような気がするのだが、シオンの笑顔とどつと押し寄せてきた疲労感に、気力は根こそぎ奪われてしまう。>br< 電源を入れたままになっている携帯だけは何とかしないといけない。取りあえず、携帯の簡単な仕組みをシオンに教え、電源の切り方を伝えた。>br<「……疲れたよ」>br< シオンが去り、ひとりきりになった美桜はどさりとベッドに倒れ込んだ。>br< 色んなことがあり過ぎて、頭の中はぐちゃぐちゃだ。到底眠れそうにないと思っていたけれど、横になった途端瞼が重くなる。>br< 眠りに落ちる寸前、美桜はぼんやりと思った。>br< あのメールを送ってきた人物は、自分がいなくなつて喜んでいるのだろうか、と。>br<

第3章 暴かれる嘘 (1)

翌日、美桜が目を覚ましたのは、太陽が天高く昇ってからだった。

> b r < 昨夜あんなことがあった割には、一度も目を覚ますことなく熟睡できたと思う。よく眠ったからか体は軽く、意識もすっきりしている。> b r < 侍女に手伝ってもらいながら、今日もドレスを身に纏う。淡いオレンジ色で生地は上質だが、デザインはシンブルなものだ。> b r < 着替えが終わると侍女が事務的な口調で告げる。> b r < 「シンシア様のお目覚めを、皆様がお待ちになつております。取り急ぎ、サディク様にご報告して参ります」> b r < そう言つて儀礼的な礼をすると、美桜の返事も待たずに部屋から出て行つてしまった。> b r < 美桜は侍女の台詞に首を傾げていた。皆が待つているとは、どういうことなのだろう。それなら起こしてくればいいのに。> b r < 今日に限つてひどく寝坊をしてしまった美桜は、うなだれながら何気なく鏡を覗き込んだ。> b r < 十分な睡眠の賜物か、^{たまもの}顔色はすこぶるいい。前髪を軽くつまんで整えながら、ふと違和感を覚える。何だろうと思ひながら、じっくりと鏡に映る自分の姿を見た美桜は、あるものに気がついた。

> b r < ほつそりした首筋に浮かび上がる赤い印。蚊に刺されたときのようなものが、首筋にできていた。> b r < (蚊、かな？でも全然かゆくないけど)> b r < 何か違う虫にでも刺されたのかも知れない。何しろ異世界の虫なのだ、悪い虫でなければいいのだけど。そう思いながら、もつと鏡に首を近付けて赤い印を見た美桜は、きゅつと眉を寄せた。> b r < よくよく見てみると、虫刺されというより内出血しているようだった。> b r < 「……あ」> b r < はたとある事実思い至つた美桜は、ぱつと首筋に手を当てる。> b r < こ、これはもしか……キスマークというものではないのだろうか？> b r < 怖かったし、混乱していたからはつきりそうだと断定できないが、確か昨夜王に首筋をきつく吸われた

記憶があるような気がしないでもない。>br<「やだ、どうしよう」>br< ぼつと耳まで真っ赤に染めて、美桜はおろおろと視線をさまよわせる。>br< どうして教えてくれないのよ。と、出て行った侍女を心の中で詰る。^ないや、でも指摘されたらされたで気恥ずかしいに決まっている。その前に全く気付かなかった自分が恨めしい。というか、そもそもこんなものをつけた王が一番悪い。>br< きつとわざとだ。絶対そうだ。根拠などないが、性格の歪んでいそうなあの王のことだから、故意に決まっている。>br< 美桜は悔しさの余り、ぐつと拳を握り締めた。だが今はそんなことを考えている場合ではない。ぐずぐずしていたら、シオンがやって来てしまう。>br< キスマークをつけた姿なんて彼に見られたくない。恥ずかしすぎて死んでしまう。>br< ばんつ、とクローゼットを開き、何か隠せるものがないかと探してみる。絆創膏でもあればいいのだけど、ここは異世界。そんなお手軽で便利なものなどありはしないのだ。>br<（どうしよう。シオンさんが来ちゃう）>br< ドレスの裾をたくし上げ、クローゼットを漁っていた美桜はもう半泣きだった。>br<「失礼。どうかしたのですか、ミオ？」>br< 耳に心地よく響く声に、美桜はぴたりと動きを止めた。シオンの声を聞いた途端、心臓が無駄に動きを速める。反射的にキスマークのついた首筋を手で隠し、やけに緩慢な動作でシオンがいる入口付近に体を向ける。明らかに挙動不審だった。>br< 軽く首を傾げ、静かな眼差しを向けてくるシオンは、今日も素敵だ。だが今の美桜にはシオンに見とれている心の余裕はない。>br< 昨夜の出来事もあり、シオンも美桜の様子には細心の注意を払っているのだろう、すぐさま異変に気付き、つかつかとクローゼットの前に立ち尽くす美桜のそばへやってくる。>br<「昨夜は眠れましたか？」>br< 気遣わしげな眼差しに凝視されて、美桜は無意識のうちに首筋に当てた手に力を込めた。>br< その動作にシオンの眉がひそめられる。首筋にシオンの大きな手が躊躇いがちに伸びてくる。焦って後ろに下がろうとする美桜

だが、もう片方の手を取られ引き寄せられてしまった。>br<
首筋に当てた手に、シオンの手が触れる。びくりと体を震わせて、
美桜はきつく瞼を閉じた。剥き出しになった首筋に、シオンの視線
が注がれているのかと思うと、たまらなく恥ずかしい。みるみるう
ちに美桜の肌が色付いていく。>br<「……っ！」>br<「つ、
とシオンの指がキスマークに触れて、美桜は声を押し殺し、固く閉
じていた瞼を開いた。」>br<「意外なほど近くにシオンの体があ
り、驚いて瞳を見開く。シオンは体を軽く折り、美桜の首筋に顔を
寄せていた。」>br<「……悪い虫に刺されたみたいですね」>b
r<「するすると首筋を滑る指先と、微かな吐息に背筋がぞくぞく
する。奇妙な感覚を持て余し、瞳を揺らす。」>br<「消毒して差
し上げたいのですが、残念ながら今は時間がありません。……ドレ
スと同じ色のリボンを」>br<「艶やかな色を宿した瞳で笑まれ、
美桜は息を止めた。同級生の男の子とは比べようもないほど魅力的
な微笑み。匂うような大人の色香に、色恋に無縁だった美桜は、た
だただばうつとするばかりである。」>br<「シオンは微かに口元
を緩めると、いつの間にか入口近くに控えていた侍女に指示を与え
る。」>br<「シオン以外の人間を認識した美桜は、はつと我に返
り、慌ててシオンから離れた。」>br<「きつと惚^{ほう}けた顔をしてい
たに違いない。さして親しくもない人間に、そんな表情を見られた
のかと思うと、火が出そうなほど頬が熱くなる。火照った頬を両手
で押さえ、どくどくと暴れる心臓を懸命になだめる。」>br<「シ
オンに命じられた侍女が、オレンジ色のリボンを手に、美桜のそば
に来ようとする。」>br<「それを私に」>br<「侍女の手から
リボンを奪い取ったシオンは、慣れた手つきで、キスマークを隠す
ように首に巻いていく。光沢のあるサテンのリボンが、しゅるしゅ
ると音を立てる。まるでショーウィンドーに飾られるマネキンのよ
うだと思ってみたりする。」>br<「さあ、これで大丈夫」>br
<「力強い微笑みに促され、鏡に自分の姿を映す。リボンで綺麗に
飾られた首に、目を見張る。シオンが結んでくれたリボは、見事な

ほどドレスと調和していたのだ。>br<「では、参りましょうか？」>br<「はい」>br< 頷きながら答え、シオンの後に続く。ふと、足を止めた。前を歩く広い背中に躊躇いがちに声をかけた。>br<「あの、シオン様」>br<「何か？」>br< 背中に広がる長い黒髪を揺らし、シオンが振り向いた。アクアマリンの瞳が柔らかく細められる。>br<「あつ、あの。後で消毒してくださいますか？」>br< ときどきする胸を手で押さえる。こんな願いを口にするのは、多少なりとも恥ずかしい。キスマークは傷ではないから、本当は消毒なんて必要ない。でもあの王様が触れた跡が、こうもくつきりと残されていると、どうしても気持ち悪いと思ってしまう。>br< 幸いにも虫刺されだと勘違いしてくれたシオンの台詞から、消毒でもすれば不快感もいくらかましになるだろうと思ったのだ。だから勇気を振り絞って願いを口にのせたのだった。>br<「よいのですか？ 私が消毒しても」>br< 少しだけ驚いたような顔になる。>br<「え？」>br< もとはといえばシオンから言い出したことだった。それなのにどうしても彼が驚いた顔をするのだろう。>br< 戸惑う美桜に向かってシオンはくすりと笑う。>br<「いえ、何でもありません。ミオは本当に可愛い」>br< 満面の笑顔と殺人的な台詞に、美桜はしばらく意識を飛ばしてしまったのだった。>br<

第3章 暴かれる嘘 (2)

部屋を出て歩いていると、美桜の気持ちも落ち着いてきた。どこへ行くのかと尋ねても、シオンは困ったように笑うだけで、行き先を教えてはくれない。>br< 廊下を歩き、右に左に幾度も曲がる。与えられた部屋にこもりがちだった美桜には、どこに向かっているのか、どこにいるのか全くわからない。これでは到底ひとりで戻ることなどできそうにない。>br< 行き先もわからず、帰り道もわからない。だんだん不安になってくる。そんな時、目の前に古びた鉄の扉が現れたのだ。扉の前に立つ、鎧のようなものを身に付けた兵士は、シオンの姿を認めると姿勢を正した。>br<「扉を開けよ」>br< やや低い声で命令する。すぐさま鉄の扉に手をかけて、兵士が重そうな扉を開いていく。ぎい、と耳障りな音がして鉄の扉が開いた。扉の内側に消えた兵士が、ランプを手に戻ってくる。兵士からランプを受け取ったシオンは、美桜の背中に手を回し先を促した。>br<「足元にお気をつけください」>br< 美桜は軽く頷くと、ぽつかりと口を開いた入口へ足を進めた。>br< 扉の内側には階下へと続く階段があるだけだった。両側の壁にランプが掛けてあるが、十分な光量があるとはいえない。階段の幅は狭く、人ひとりがやっと通れるくらいで、シオンが先に下り始め、体を器用に捻り、ランプで美桜の足元を照らしてくれる。>br<「ありがとうございます。シオン様は大丈夫ですか？」>br< 気を遣ってくれるのはうれしいけれど、無理な体勢で狭い階段を下る彼が心配になる。>br<「ご心配なく。慣れていきますから」>br< ふわりと空気が揺れて、シオンが微笑んだような気配がする。少し安心して、自分が足を踏み外さないように、慎重に一步步つ下りていく。>br< 下りていくに従い、空気がじめじめして、肌にまとわりつくような感じがする。そういえばどこなかくカビ臭く、すえたような臭いも混じってくる。美桜は思わず眉を

ひそめ、片手で鼻を覆った。>br< 地下には何があるのだろうか。嫌な予感に肌が粟立つ。地下室にたどり着いた美桜は、ぶるりと身震いした。>br<「怖がらないで。何があつたとしても、貴女は私がお守りします」>br< 美桜の怯えを感じ取つたのか、シオンが熱のこもつた眼差しで囁く。>br< 温かい両手で頬を包み込まれ、いくらか気分も楽になつた。もう周囲に漂う異臭もさして気にならない。シオンに向かつて微笑むと、美桜は再び歩き出した。>br< 左右に視線を転じる。廊下の両側には鉄格子のはめられた小部屋が幾つかあつた。>br< ——地下牢。そんな単語が脳裏に浮かんた。>br< 目を凝らして鉄格子の中を見る。ごつごつした石の床には、染みのようなものが所々ある。それが何かはあえて考えないように、意識の外に閉め出した。>br< この地下室の用途はやはり牢なのだ。今は誰も投獄されていないのが、救いといえば救いだつた。>br< 真つ直ぐ進んだ先に、扉があつた。この扉の向こうに何が待っているのか……。>br<「シオンです。入りますよ、デイス」>br< シオンが王の名を呼び、扉を開く。美桜はごくりと喉を鳴らし、シオンに続いて室内へ足を踏み入れた。>br<>br< 外とは違い、室内は光に溢れていた。狭い室内に数多くのランプが掲げられ、部屋の壁の四隅には、松明が勢いよく燃えている。薪の爆ぜる音を聞きながら、明るさに目を細めていると、あまり会いたくない人物の声がした。>br<「待ちくたびれたぞ」>br< 殺風景なこの場所に、何故だか不似合いなほど豪華な椅子があつた。そしてその椅子に声の主は座っている。>br< 昨夜とは違い、十分な明かりの下で見る王は、研ぎ澄まされた刃のような、鋭利な美しさを放っていた。長い足を組む姿も、軽く首を傾げる仕草も、炎に照らされて輝く銀の髪も、冷たく光る碧眼も、憎たらしいほど絵になっている。>br< その王の正面。少しだけ離れた場所に、黒い布に覆われた大きな塊があつた。>br<「さあ、裁きを始めよう。シオン！」>br< 不敵な微笑みを刻んだ王は、ひどく危険な香りがする。何の

裁きが始まるのかは知らないが、きつとろくなものではないだろう。
> b r < 王の言葉にシオンが動いた。黒い布手をかけると、躊躇うことなく一気に取り払う。> b r < 「……っ!?」> b r < 布に隠されていたものの正体を目にした美桜は、両手を強く口に当て辛うじて悲鳴をのみ込んだ。目にしているものが信じられない。信じたくない。きつと幻だ。そうに決まっている。そうであって欲しい。> b r < 瞳がこぼれ落ちそうなくらい大きく目を開き、体を貫く激しい衝撃にうち震えた。> b r < 美桜が目になっているのは、鏡に映った自分だった。薄汚れ、やつれてはいるが、紛れもない自分と瓜二つの顔がそこにあった。> b r < 「シンシア、どうして……。おじ様、おば様……」> b r < 自分の口から出たとは思えないほど、しわがれてかすれた声に、これが現実なのだと認識する。
> b r < 後ろ手に縛られ、猿ぐつわをされたシンシアは、固く冷たい石の床に跪いていた。そして彼女の隣には両親であるディディ工伯爵夫妻がいる。夫妻も娘と同様に縄で戒められていた。> b r < 「口がきけるようにしてやれ」> b r < 王がまたシオンに命じる。その声を聞きながら、美桜はただ茫然とするばかりだ。> b r < 「この裏切り者っ！」> b r < 猿ぐつわを外されたシンシアが金切り声で叫んだ。叫びは鞭のようになり、美桜を打つ。激しい怒りの対象が自分だと知った美桜は、弾かれたように王を見た。> b r < 王は緩く笑むと、視線をシンシアに移してしまう。説明するつもりも事態を收拾つもりもないらしい。> b r < ——裏切り者。> b r < 叩き付けられた言葉は、身に覚えのないものだ。確かに昨夜自分の身の上と、身代りだということを打ち明けた。けれどそれはディディ工家の侍女が白状したという、シオンの言葉があったからだ。助けを求めるように、シオンの姿を探す。だが彼は王の傍らに控え、こちらを見ようもしない。> b r < どういうことなのか、美桜の頭の中は混乱するばかりで、シンシアにかけるべき言葉が見つからない。> b r < 「おまえが出発してすぐだったわっ！ 私達が捕らえられたのはっ！ 最初から私達を騙すつもりだ

つたのね。誰の差し金なのよっ！」>br< 肩で息をつくシンシアは、怒りに燃えた瞳で美桜を罵った。>br<（一体何を言っているの。騙すって何のこと？）>br< 頭の中ではちゃんと言葉が浮かぶのに、現実には口元を震わせ、ただ喘ぐしかできない。>br< 怖かった。シンシアの瞳が。憎悪と嫌悪と侮蔑に満ちた眼差しが、あちらの世界での出来事を思い出させる。何がどうなっているのかわからない。美桜はぎゅっと目を閉じて、襲ってくる不安と痛みに耐えようとした。>br<「陛下、どうかお聞きください。全てはこの者が言い出したことなのです。それを受け入れた私達にも非があります。ですが、この者が現れなければ……身代わりなど言い出さねば、罪を犯すことなどなかったのです。きっと誰かの策略に違いありません。私に生き写しのこの者を使って、我がディレイ家を貶めようとしているのです」>br< 何も言い返さない美桜を見て、シンシアは自信に満ちた表情すら浮かべ、王に訴えた。それはまるで全ての罪が美桜にあるかのような口振りで、愕然とするばかりだった。>br< 身代わりを言い出したのは間違いない自分だ。だからシンシア達に非はない。けれど……誰かの指図を受けたからではない。ただ、ディレイ伯爵夫妻から受けた親切に、応えたかっただけなのだ。>br< シンシアは誤解しているのだ。捕らわれて怖い思いをして、それでそんな風に思い込んでしまったのだろう。美桜はそう考え、シンシアからディレイ伯爵夫妻を視線を移した。夫妻はうつむいたまま、ただ黙っている。娘の言葉を肯定も否定もしない。もちろん美桜と視線を合わそうともしない。>br<「ほう。それではこの娘にこそ罪があるか？」>br< 王が片頬を歪めて顎をさする。>br<「はい。仰せの通りにございます」>br< 王の問いに、シンシアは深く頷いた。>br<「……と、シンシアは言っているが？」>br< 長い足を優雅に組みかえて、王は冷たく光る碧眼を美桜に向けてきた。どこか面白がっているような眼差しに、ぐっと奥歯を噛みしめる。場違いなほど華やかなオレンジ色のドレスの裾を握り締め、覚悟を決めて口を

開いた。>br<「……昨夜お話したように、身代わりを言い出したのは私です。ディディ工家にかけられた疑いが晴れるまで、私が後宮で身代わりをしていればいいと思っていました。見ず知らずの私を助けてくれて、親切にしてくださいました伯爵夫妻に、何かお礼がしたかったからです。ただ……それだけです」>br< 身代わりを申し出た時の気持ちを思い出しながら、美桜は唇を噛む。>br<「嘘よ！ そんな嘘に騙されしないでください、陛下！」>br< すかさずシンシアが叫んだ。>br<（本当だよ。嘘なんかついてないよ）>br< 信じてもらえないということが、こんなに悲しくて苦しいものなのかと、美桜は痛む胸を押さえる。>br< シンシアと美桜を交互に見ていた王が突然、壊れたおもちゃのように笑いだした。>br<「くくくつ！ ……実に面白い。双子のよきな容姿を持ちながら、中身は正反対とはな！ この私を欺こうとした、その度胸だけは認めてやろう。だが……少々考えが甘かったようだな、シンシアよ」>br< 笑いをおさめた王が、暗い瞳でシンシアを見据えた。>br<

第3章 暴かれる嘘 (3)

王の言葉に、その場にいた人間の視線がシンシアに注がれた。>br< 皆の視線を受けても怯むことなく、シンシアは傲然と顎を上げ、艶然とした微笑みすら浮かべている。>br<「何か申し開きは？」>br< 淡々とした問いに、シンシアも簡潔に返す。>br<「いえ、何も」>br< その表情からは罪を犯したことを悔いているようには見えない。美桜にぶつけた怒りや憤りは嘘のように影を潜め、今はつかみとれない笑顔を張りつけている。>br< デイデイ伯爵夫妻は、そんな娘をたしなめるでもなく、代わりに申し開きをするでもなく、やはり黙したままうつむいているだけだった。>br<「ならば裁きを下さねばならない。そうだな……では利用された本人に裁いてもらうというのはどうだろう」>br< 王とシンシアのやり取りを、固唾を飲んで見守っていた美桜は予期せぬ話の流れに目を円くする。>br<「……え？」>br< 薄く開いた唇から掠れた声を漏らし、再びドレスをきつく握る。>br<「ミオ、と言ったか？ おまえはこの者達をどうしたい？」>br< 薄ら笑いを浮かべた王の瞳は、表情とは裏腹にひどく真摯な色を宿している。傲慢で冷徹な印象しか持っていなかった美桜は、違和感を覚えて何度か瞬きをした。だけどそれはほんの一瞬の幻で、美桜が再度視線を合わせたときは、いつもの凍てついた碧眼があつた。>br<「え、あの。利用されたとか、裁くとか。一体どういうことですか？」>br< 気のせいだったのかと思いがながら、今までの話で理解できていない内容を尋ねた。何だかさりと重大な役割を与えられてしまったと思ったからだ。>br<「つくづくおめでたい頭をしているようだな。ミオ、おまえは利用されたのだ。偶然拾った娘が、自分に生き写しだと知って、シンシアは身代わりを思い付いた。おまえがシンシアとして王都に向かっている間に、自分は隣国へ身を隠すか、もしくは隣国の兵を招き入れるつ

もりだったはず。事が発覚するまでの時間稼ぎを担わされていたのだ」>br< まあ、初めからわかっていたことだがな、と王はつまらなさそうに鼻を鳴らした。>br<「……え？」>br< 王の整い過ぎた容貌を凝視したまま、美桜はぼかんとした顔をして、微かな声を漏らした。>br< ぎこちなく首を動かして、王の傍らに立つシオンを見る。目が合った瞬間、さつと逸らされてしまう。>br<（……そんな）>br< 次にデイディエ伯爵夫妻を通り過ぎ、シンシアに目を向ける。>br< シンシアは美桜の視線から逃れようとはせず、真っ直ぐ見つめ返してくる。逆にこちらがたじろいでしまうような透明な瞳に、わけがわからなくなる。何が嘘で何が真実か、思考はぐちゃぐちゃに乱されて、見極めなんてできない。そんな美桜の心を見透かしたように、シンシアがゆっくりと口を開いた。>br<「ディス様が国王の座に就いてから、隣国は機会があれば攻め込もうと、こちらの隙をうかがっているわ。万が一戦になれば、国境を接する我が伯爵家が真っ先に犠牲になる。与えられた領地で暮らす民達を守る義務が、私達にはあるの。求心力のない、疑惑にまみれた王に何ができるというの？ 私達は私達だけの力で領民を守らねばならないのよ。……そのためには手段を選んでなどいられない。戦をすれば土地が荒れる。民達の心も憎しみで凝り固まる。あちらもできれば戦なしに領土を手に入れたいはず。利害の一致をみるのは、あつという間だった。あとはどうやって上手く事を運ぶか……。そんなとき、後宮入りの話が持ち上がり、嘘みたいなタイミングでおまえが現れた。だから利用した。……結局、陛下には全てお見通しだったようだけど」>br< それは確かに美桜に向けて発せられた言葉だった。だがとりわけ平和な日本で暮らしていた美桜にとっては、理解に苦しむ内容で、認めることのできないものだつた。>br<「嘘、でしょう？ だっておじ様もおは様もすごく親切で、身代わりを言い出したときだって、あんなに心配してくれたじゃない？ こ、この人に酷い目に遭わされて、それでそう思い込まされたんじゃないの？」>br< この人と、王

を指す手が震えている。>br< 取り調べとかが厳しかったりして、毎日おまえがやったんだらうと責め立てられると、やっていないことも、自分がやったと認めてしまうということもあるだろう。……これは冤罪というものに違いない。>br< 伯爵夫妻の優しさ、自分を利用するためだけのものだったと認めたくない。美桜は祈るような気持ちで、シンシアの言葉を待った。>br<「本気でそう思っているのか？ つくづく救いようのない頭をしているよ。うだな。……寝所で私に組敷かれても、この娘は身代わりだと明かさなかったぞ。見かねたシオンが、ディディエ家の侍女が全て打ち明けたと嘘をついていなければ、今頃どうなっていたのか。愚かな娘を手懐け、自ら身代わりを言い出すように仕向けるのは、赤子の手を捻るように容易いようだったと、ディディエ家に潜り込ませていた手の者から聞いているぞ」>br< 呆れたように美桜を一瞥すると、王は手品の種明かしをするように、実に愉しげに笑いながら、事の次第を話して聞かせた。>br< 王の言葉に顔をなくしていく美桜とは対照的に、シンシアは晴れやかな表情になる。>br<「そういうこと、でしたか。ならば仕方ありませんわね。それにしても……馬鹿な娘。捨て駒に使われたというのに、それすら理解しようとしないなんで。はつきり言っただけ。全部陛下が仰せになられた通りなの。初めから利用するつもりで、親切にしたのよ」>br< 嘲笑うような口調に、今まで必死に堪えていたものが込み上げる。>br< 見下すような瞳に、あの雨の日の出来事がまざまざと甦る。>br<「……ひどい。ひどい。ひどいよおっ！」>br<「……体が熱い。真夏の太陽にじりじりと焼かれているみたいに、汗がどつと噴き出す。手のひらに爪が食い込むほど強く拳を握り締める。息が苦しくてたまらない。頭がきりきりと締め付けられるように痛む。心臓が別の生き物のように、体の内側で暴れている。胸の奥で蠢くどす黒い感情を、もう止めることはできなかった。」>br<「……さ、ない」>br< 老婆のようにしわがれた声に、王は片眉を上げ、シンシアは瞼を閉じた。

> b r < 「許さない。あんたたち最低よ！ 絶対許さないんだから
っ！」 > b r < かつと目を見開いて、美桜は声を荒げた。燃える
ような怒りを宿した瞳に、王だけが満足気な微笑みを浮かべている。
> b r < > b r < 絶対許さない。 > b r < > b r < 心の中で呪
文のように繰り返す。身を翻した美桜は乱暴な仕草で扉を開くと、
嘘と裏切りに満ちた部屋を飛び出した。 > b r <

第3章 暴かれる嘘 (4)

後ろ手に扉を閉めて背中を預ける。ひとりになると、堪えていたものがどつと溢れてきた。>br<「……うう」>br< 嗚咽を漏らしながら零れる涙を乱暴に拭い、美桜は小走りに通路を進む。

>br< こんなに急いで何処へ行くんだろう。>br< 涙で霞む視界がもどかしい。行き場所なんてこの世界の何処にもないのに
>br< 帰りたい。そう切実に願う。こんな冷たくて残酷な世界になんていたくない。平和で穏やかな、自分の世界に帰りたい。>br< それは本当?>br< あの世界に争いはなかった?>br< 意識して避けていただけじゃないの?>br< 妙に冷めた声が、何処からか聞こえてくる。>br< わからない、何も。わかりたくもない、今は。>br< 思う存分泣いて、喚いて、罵つて、何も考えられないくらいに疲れてしまいたい。>br< でもそんなみつともない姿は、誰にも見られたくない。そうだから早く部屋に戻って、人払いをして、ひとりになるのだ。>br< 「待つて!」>br< 地上へと続く階段に片足をかけたとき、呼び止める声がした。びくり、と条件反射のように震える体に、美桜は笑いたくなる。びくびくする必要なんてないとわかっている。悪いのは圧倒的に向こうなのだ。>br< だから振り返りもせず、薄暗い階段を慎重に上り始めた。けれど声の主は諦めてはくれないようにで、靴音を響かせて駆けてくる。>br< 腕を引かれ、腰に手を回され、美桜は状況も忘れて激しく身を擦よじった。>br< 「は、離してっ! 触らないで……っ、きゃ」>br< 階段を踏み外してバランスを崩した体が、強く引き>寄せられる。半回転した体が何かにぶつかる。背中と後頭部に触れる大きな手に、離さないでというように力が込められていく。>br< 「や、離して」>br< 「嫌だ」>br< 耳元で囁かれたシオンの低い声に心が震える。触れ合う場所から伝わってくる彼の体温を心地良いとさえ思っ

まう。抱いていた怒りが、シャボン玉のように弾けて消えてしまいそうになる。>br< それでも美桜はありったけの理性をかき集め、シオンの胸を両手で押し返した。>br< 「お芝居はもういいです」>br< 全部嘘だったのだ。優しくしてくれたのも、何もかも。砂を噛むような思いに口元を引き結ぶ。>br< 自分で口にしておきながら、シオンの顔を見るのが怖かった。ええ、そんなですよ、と言われたら、きっと心は粉々に砕けてしまう。>br< 「行きましょう」>br< やや間を空けて、シオンはそれだけを口にした。弁解する必要なんて、彼にはないのだと思い知らされた。だったらどうして追ってくるのか。放って置かれた方が、よっぽどましだと思えた。>br< 促されるまま再び階段に足をかけた。背後にシオンの存在を痛いほど感じながら、地上へと戻るのだった。>br<>br<§>br<>br< 一階へ着くと、シオンが先頭に立った。扉を警護する兵士が、シオンと美桜に向かつて姿勢を正す。シオンは軽く手を上げてそれに応えている。>br< 涙の跡を見られなくて、美桜はうつむいたままシオンの後について行く。ひとつ目の角を曲がったとき、不意に手首をつかまれた。小さく飛び上がった反射的に腕を引く。それでも離してくれなくて、ただつかまれた箇所痛みが走っただけだった。>br< 今までのシオンからは考えられない強引さに、美桜は戸惑う。ずんずん先を行く彼に、半ば引き摺られるように部屋へ向かった。>br< やや乱暴な仕草で扉を開いたシオンは、美桜が室内に足を踏み入れると、まるでそうするのが当然であるかのように後を追って部屋に入り、扉を閉めた。二人きりという状況に、ひどく落ち着かない気持ちになる。>br< 話すことは何もないし、ひとりきりになりたかった。うつむいたまま部屋の隅に立ち尽くす。少しでも動いたり喋ったりしたら、何かが起きそうな、壊れてしまいそうな気がする。まるで棒切れになったみたいに、全身が強張っていた。>br< 互いに身動きひとつしないまま、時間だけが過ぎていく。実際にはほんの僅かな間だったに違いないが、美桜には長すぎるほ

ど長い時間だった。>br< 折れたのはシオンの方だった。彼は小さく溜息をついた。>br<「何か、気持ちを落ち着かせてくれるお茶でも、お持ちしましょう」>br< 昨日までと変わらない、柔らかな声が耳に届く。その声に誘われるように顔を上げた。アクアマリンの瞳を彩る影に、胸を衝かれる。ざわざわと心が騒いだ。>br<「やっと私を見てくれましたね」>br< 優しく細められていくシオンの瞳に、美桜の頬がほんのり染まる。>br< もう彼が芝居をする必要などない。これは、このシオンの気遣いと、向けられる眼差しは何なのだろう。信じてもいいのか。それともまだ何か利用価値が、自分にあるのだろうか。向けられる好意を素直に受け取ることには抵抗があった。>br<「すぐ戻ります。待っていてくださいますね？」>br< 請うような表情に、こくりと頷いてしまう。言葉はなくても、シオンにはそれで十分だったのだろう、綺麗な微笑みを残し、部屋を出て行った。>br< ひとり残された美桜は、もう取り乱したりすることはなかった。不思議と涙も乾いてしまったようだ。>br< けれど怒りや悲しみが消えてなくなってしまったわけではない。今だって胸には鈍い痛みが残っている。>br< 自分を騙した王やシンシアを許せないという気持ちに変わりはない。それらを知っていて黙っていたシオンを酷いと思う気持ちもある。>br< 美桜は窓際に向かつて歩きながら、だけど、と心の中で呟く。>br< レースのカーテンを人差し指でめくり、外の景色を眺める。>br< きらきらした太陽に照らされて、緑はいきいきと生い茂り、可憐な花を咲かせている。空は青く高く澄みわたり、鳥が一羽二羽と舞っている。>br< 同じなのだ。ここで目にする風景は、自分がいた世界と変わらない。だからここが異世界で、国や風習や文化が違ってても、やっぱり人間というものは同じなのだろう。>br< 人を騙したり利用したりする人間はどこにでもいるということだ。それはとても悲しいことだけれど。>br<（どこに行っても騙されるなんて、よっぽど間抜けに見えるのかなあ）>br< 騙すより騙される方がましだと思っ

けれど、さすがにこうも続くと情けなくなる。目に映る晴れやかな景色とは裏腹に、ずんと気分が滅入ってくる美桜だった。>br< >br<「ありがとう、ございます」>br< ぼんやりと窓際で物思いにふけっていた美桜は、戸惑いながら差し出されたティーカップを受け取った。いつの間にかシオンが戻ってきていたらしい。全然気づかなかったことが、恐ろしく恥ずかしい。>br<「いえ、どういたしまして。それより貴女がいなくなってしまったかと思いました」>br< ノックをしても返事なかったからだろう。>br< いらぬ心配をさせてしまったのだと申し訳なく思いかけ、いやいやと思いつまる。姿を消したくなるような目に遭わせたのは、シオン達なのだ。謝る必要なんてない、と思った。>br<「考え事を、していたんです」>br< 嘘ではない。本当のことだ。>br< 渡されたお茶に口をつける。独特の香りがふわりと鼻先を掠めた。口に含むと、仄かに甘い。何より人肌の温度に気持ちが安らぐ。>br<「言い訳は、しません」>br< 厳しい目をしたシオンに、緩みかけていた口元を引き締めた。>br<「けれどその分、償いをさせてください。今後の生活と身の安全は、我々が保証します」>br< 沈痛な面持ちに、あと落胆する自分がいた。優しい気遣いや、言葉にはやはり思惑があったのだと。>br< 昨日までは利用するため。今日からはその罪悪感を少しでも軽くするため。>br< 危うく勘違いするところだった。そんな美桜の心の動きに気付くはずもなく、シオンは言葉を重ねていく。>br<「貴女の住む世界は、きっと穏やかで優しいのでしょうね。ここは汚い世界ですよ。不謹慎かも知れませんが、デイディ伯爵に助けられ、我々の元へ来たことは、結果的にはよかったのだと思います。でなければ、無垢な貴女は……。あ、申し訳ありません。言葉が過ぎました」>br< 黙ってうつむく美桜に気付き、シオンは言葉を収めた。>br< シオンの言いたいことはわかる。デイディ伯爵家ではなく、別の誰かに発見されていたら。そうしたらもっと酷い目に遭っていたのかも知れな

いのだろう。そしてそうなる確率がひどく高いのだ、この国では。
> b r < 怪我の功名、というやつだ。騙され利用されたけれど、
そのおかげでこの国の王の庇護を受けることができるのだから。>
b r < 「そう、ですね」> b r < 同意した声は思いの外冷ややかなものだった。> b r <

第3章 暴かれる嘘 (5)

それから何事もなかったかのように、いつもと変わらない一日が過ぎていった。>br< 昼食、午後のお茶、夕食と、侍女は相変わらずの無表情で淡々と仕事をこなしていった。何も聞かされていないのか、それとも知っていて敢えて変わらぬ態度を取っているのか。>br< 最初はとう振る舞っていいのかわからなくて、あれこれと考えたりしたのだが、無駄に疲れただけだった。>br< シンシア達の企みが露見したからには、美桜が身代わりとしてここで暮らす理由はなくなった。生活の保証はしてくれるというところだから、何処か別の場所に移されるのだろう。>br< もう争い事に巻き込まれることもないだろう。多少不便でも、平穏な生活が送ればそれでいい。>br< 自分を騙して利用した人間達の世話になるのは不本意だが、背に腹は替えられない。帰る方法がわかるまで、この世界で生きていかなければならないのだから。>br< 美桜は現実だけを見つめようと、揺れる心を懸命に宥め、眠りについた。>br< だが、そんなさやかな望みさえ叶えられないことはないのだと、この時の美桜が知るはずもなかった。>br< >br<s>br<>br< 次の日の朝、乱暴に扉を叩く音がして、美桜は目を覚ました。のっそりと身を起こし、重い瞼を持ち上げる。>br< まだ辺りは薄暗い。空気もどことなくひんやりしていて肌寒い。美桜は思わず両腕を擦った。分厚いカーテンに覆われているせいで、もう日が昇っているのかはわからない。それにしても何事だろう。>br<「ミオ、ミオ。起きてください！」>br< 扉の向こうから聞こえるのは、切羽詰まったシオンの声だ。その声に急かされるようにベッドから下りると、寝巻きの上にシルクのガウンを羽織る。手櫛で髪を整えてから、ひとつ深呼吸すると、扉を開いた。>br<「落ち着いて聞いてください」>br< 少しだけ開いた扉の隙間から、青ざめたシオンの顔がのぞく。急いで

走って来たのか、艶やかな長い黒髪は乱れ放題で、腕やシャツのボタんに絡まっていた。>br<「どうしたんですか？」>br<眉をひそめ、ともかく室内に招き入れる。>br<「処刑が行われることになったのです」>br< 処刑、などという物騒な単語に、美桜はぱちぱちと瞬いた。シオンは何を伝えに来たのだろう。誰がどういう理由で処刑されようとも、関係なんてないはずだ。きょとんとしている美桜を見て、シオンは言葉が足りなかったと悟ったのだろう、沈痛な面持ちで言い添えた。>br<「デイディ伯爵一家の処刑です。今朝執り行われると、私もつい先程知らされたのです」>br<「え？」>br< シオンの顔を見つめたまま、美桜は瞳を見開いた。頭を金槌が何かで殴られたようだった。衝撃が大きすぎて、言葉にならない。>br<「そんなどう」>br< どうして、といいかけて、美桜は大きく息を吸い込み、両手で口元を押さえた。>br<（まさか、私のせい？）>br< 許さないと言ったから、だから王が処刑を命じたのだろうか。そんな馬鹿なと思う。だって処刑されるなんて思いもしていなかった。ただ少し懲らしめられるくらいだと思っていたのだ。言葉にならない想いを瞳に込めて、じつとシオンを見つめる。彼は何も言わなかったけれど、その瞳は美桜の杞憂を肯定していた。>br< わんわんと激しい耳鳴りがして、一瞬目の前が暗くなる。その場に崩れ落ちそうになる美桜を、シオンが抱き止めた。>br<「ごめんなさい。大丈夫ですから」>br< ふらつく体を支えてくれる逞しい腕を、うれしくも悲しく感じてしまう。シオンの腕の中から逃れて、美桜は壁に寄りかかった。>br<（どうしよう。どうしよう……）>br< それしか考えられない。きつと止められやしない。美桜が決めて、王が裁定したのだから。>br< 感情に任せて吐き捨てた言葉で、人の命を奪ってしまう。その事実が体が震え、押し潰されそうになる。>br<「今ならまだ間に合うかも知れません」>br< ふわりと空気が動いて、爽やかな香りがした。視線を動かすと、長身を屈めてこちらを気遣うシオンが見えた。この香りはシャンブ

「何かだろうか。そんな場違いなことを考えてしまう。」> b r <
「でも王様が」> b r < あの王が裁定を覆すはずがない。美桜は
力なくうなだれた。> b r < 「ではこのまま何もしないのですか？」
> b r < それでいいのか、と暗に仄めかされ、美桜はきゅつと唇
を噛み締めた。> b r < 「行きます、私。……連れて行ってくれま
すか？」> b r < 何もせずにはいられない。彼らに死んで欲しい
なんて、これっぽっちも思っていない。> b r < 「もちろん。貴女
が望むなら何処へでも」> b r < 満足そうな笑みを湛えたシオン
を一瞥すると、着替えもせずに廊下へ出る。> b r < 「時間がない
んですよね？ このままでいいから、行きましょう」> b r < 呆
気にとられるシオンに向かって、美桜は力強く頷いて見せた。> b
r < シオンに手を引かれ廊下を走る。寝巻きの長い裾が足に絡ま
って何度も転びそうになる。少し走っただけなのに、息が苦しくて
たまらない。見覚えのある後宮の出入口にたどり着いた時には、息
が上がって話せるような状態ではなかった。外はまだ薄暗く、太陽
は見えない。> b r < 「行きましょう」> b r < 息ひとつ乱して
いないシオンを見上げ、美桜は頷いた。> b r < 今は何故だか門
を警護する兵士はいない。誰に見咎められることなく、美桜は外へ
と続く門をくぐった。> b r < 門のすぐそばに褐色の、毛並みの
いい馬が一頭繋がれていた。> b r < 「乗馬の経験は？」> b r <
問いに、ふるふると首を振る。> b r < 予想済みだったのかさ
したる反応も見せず、美桜が馬に乗る手助けをした。馬の背中の上
は意外と高く、驚いていると、後ろにシオンの気配がして、身を縮
めた。> b r < 「そんなに前屈みになっていたら、後が大変ですよ。
背筋を伸ばして……そうです。私に背中を預けて」> b r < 言わ
れるままに姿勢を正し、シオンの胸に背中を預ける。すると両脇か
ら腕が伸びてきて、体をすっぽりと包み込まれた。> b r < 互い
の体温がはつきり伝わってしまうくらいの密着度に、くらくらと目
眩がする。だがそんなことを考えていられたのも、馬が走り出すま
でだった。> b r < 「少し飛ばします。舌を噛まないように気をつ

けて。……はっ！」>br< 鋭い掛け声がして、馬が走り始めた。激しい揺れに振り落とされやしないかと、全身に力が入る。>br< (……は、速いつ)>br< 結構なスピード感に、怖くて目なんて開けていられない。がくがくと揺さぶられ、幾度も体勢を崩しそうになる。そんなとき、さり気無く支えてくれるシオンの手があった。>br< 後宮を離れ、馬はぐんぐん駆けていく。城の裏に広がる森を目指して駆けているのだが、目を瞑っている美桜には知りようもない。>br< 身を切るような風と、蹄の音、そしてシオンの微かな息遣いだけが全てだった。>br< やがて馬は速度を落とし、ほどなくして止まった。ぎゅっと閉じていた目を、恐る恐る開いた。辺りには薄っすらと光が差し始めている。空を見上げると、東の方が明るくなり始めていた。>br< たどり着いた場所は、鬱蒼と木々が繁る森の入り口だった。遠くに見える人影に目を凝らし、はっと息をのむ。>br< 遠目にも鮮やかな輝きを放つ銀の髪。あれはきつと王に違いない。>br< そしてその前に並ぶ小さな影達。目にした途端、体が勝手に動いた。危険も省みず、馬の背から飛び降りる。>br<「……っ」>br< 着地の際に捻ったのか、左足に痛みが走った。けれどそんなことを気にしている余裕はない。だって王が手にしているのは、きらりと光る長いものだ。あれは……剣だ。それが振り上げられる！>br<「待ってえーっ！」>br< 美桜は声の限り叫んだ。そして走り始める。邪魔な長い裾をたくしあげ、形振り構わず駆ける。振り上げられた白刃が、振り下ろされないように祈りながら。>br<「……っ。待っててください」>br< 懸命な叫びは届いたようで、王は剣を鞘に納めていた。ぜいぜいと肩で息をつく美桜をちらりと見て、口の端を吊り上げた。>br<「結構な眺めだな」>br< 揶揄するような眼差しに、美桜は慌ててはだけかけていた胸元をかきあわせる。>br<「処刑なんて止めてください」>br< きつ、と王を睨み付け、ここに来た目的を口にする。ぴくり、と王の眉が不愉快そうに跳ねた。怪訝そうに瞳が細められ、>br<「何

故だ？」>br<と、問われる。>br<「私を騙したことは、そう簡単には許せそうにないです。でも、だからって死んで欲しいなんて思ってます」>br< 感じたことを素直に口にする。王はしばらく真意を探るように美桜の顔を見つめ、やがて納得したように口元を緩めた。>br<「怖いのだな？　だが案ずることはない。この者達が死なねばならぬのは、おまえのせいではない。確かにおまえは許さないと言った。だがそれだけで処刑すると決めた訳ではない。この者達は王である私を欺こうとしたのだ。その罪はおまえが考えるより重い」>br<　王はそう言って再び剣の柄に手をかけた。そしてゆっくりと、地面に跪かされたシンシア達へと向かっていく。>br<「そんな……」>br<　死に装束のような白い簡素な衣服を着せられ、目隠しをされ、地面に打たれた杭に繋がれ、逃げられないように縛められている三人を見て、美桜は呆然と呟いた。>br<「シオン、この娘を連れていけ」>br<　振り向くこともせず、冷淡に命令を下す。肩にシオンの手が回されるのを感じながら、美桜は唇を震わせた。>br<「嘘つき」>br<　それはほんの小さな声だった。>br<　銀髪を揺らし、王が振り返る。美桜の呟きが王に届いたようだった。碧眼が静かな怒りを湛えている。無言の怒りに怯みかけたが、ぐっとお腹に力を入れ、思いの丈をぶつける。>br<「私に任せるって言いましたよね？　だったら処刑なんて止めてください。止めるべきです。あなたが嘘つきじゃないなら」>br<　気圧されないように、ありったけの力を瞳に込める。王に逆らっているという意識はあったが、何がなんでも処刑を止めさせたいという気持ちの方が強かった。>br<　しばらく睨み合った後、不意に王の瞳から怒りが消えた。>br<「私に意見するとは、面白い娘だ。その度胸に免じて、処刑は中止にしてやろう」>br<　愉しげに笑う王に、全身の力が抜けていく。これでシンシア達の命は保証されたのだ。安堵に胸を撫で下ろす美桜に、王はにやりと凶悪な笑顔を向ける。>br<「おまえは実に私を楽しませてくれる。……気に入ったぞ。そうだ、おまえを

正式に私の側室に迎えよう。シンシアはおまえの侍女として仕えさせようではないか。そのように取り計らえ。よいな、シオン」>br<「ずっと血の気が引いた。全身に悪寒が走る。嫌悪に顔が歪む。だがそれすら愉快なのか、王は笑いながら言い足した。>br<「せいぜい私を楽しませてくれよ、ミオ」>br<「こうして、デイエ伯爵一家の命と引き換えに、真正正銘王の側室として、美桜は後宮に迎えられることになってしまったのである。>br<

幕間 1

「随分とあの娘のことを気に入ったようだな、シオン」>br<
デイスは執務室で山のように積み上げられた書類に目を通しながら、
部屋の片隅で同様に書類と格闘しているシオンに視線を送る。>b
r<「その台詞、そっくりそのままお返ししますよ」>br<「何
？」>br< 少しは動揺するかと思いきや、さらりとかわされて、
デイスの眉がぴくりと跳ねる。>br<「あなたの好みが、ああい
うタイプだったとは……意外ですね。まだ子供ではありませんか？」
>br< 涼しげなアクアマリンの瞳が実に楽しそうに輝いている。
>br< からかうつもりだったのに、逆に余計な詮索をされて面
白くない。しかも何処か馬鹿にされたような気がするのはいり過ぎ
しだろうか。>br< あの娘（別の世界から来たという）、ミオ
の顔を思い浮かべた。>br< デイディ伯爵令嬢シンシアと全
く同じ顔。だがシンシアとは違い、ミオは無防備な表情を見せる……
……というか隙だらけの娘だ。>br< 浮かぶのは泣き顔や、何か
を耐える苦しそうな顔ばかりで、デイスは少し不愉快になる。そう
仕向けたのは自分だから、仕方がないのだが。>br<「だから違
うと言っているだろう。だいたいおまえこそ、あの娘に随分と親切
にしているではないか」>br< むつとしながら言い返す。なに
くれとなく気遣い、機嫌を取っていると報告を受けているのだ。困
った顔が見たくて、わざとつけたキスマークも、目立たないように
リボンで隠してあった。あれも恐らくシオンの手によるものだろう。
そう思うと何だか面白くない。>br<「私が？ まあ基本的に女
性には親切にしていますからね。何もミオにだけ、ということはあ
りませんよ」>br< 二人とも完全に仕事の手が止まってしまっ
ている。>br<「そうなのか？」>br< 半信半疑で首を傾げ
ていると、はあ、とため息をついたシオンが立ち上がり、近付いて
きた。書類を脇へ押し退け、机に片手を付いてかがみこむ。>br

<「そうですよ。私が一番大切に思っているのは……貴方です。わかつてくださっていると思っていたのですが」>br< もう片方の手でデイスの髪をすくい上げ、長い指で絡め取る。>br<「紛らわしい言動は慎め。いらぬ誤解をされるだろう」>br< ぱしっと容赦なくシオンの手をはたき落とし、うんざりしたように碧眼を細めた。>br<「……ふつ、誰に？ 彼女にですか？」>br<「あの娘は関係ないと言っている。何度も同じことを言わせるな」>br< 揶揄するようなシオンの台詞に、つい声を荒げてしまう。どうしてミオにこだわるのか。自分から振った話題だったが、彼女のことにこれ以上触れられなくなかった。>br<「美貌も家柄も知性も兼ね備えた側室達に指一本触れようとしない王。側には常にシオン」サディクを従えている。そんな王が自ら望んだ娘。……また彼女を利用するのですね？」>br< 冷めた瞳と抑揚のない声音に、デイスは何だ、と納得した。>br< ミオを利用しようとしていることを怒っているのか？>br< いや、そうではない。相談もなしに勝手に決めたことを怒っているのだ。>br<「貴族でもない。ましてやこの世界の住人ですらない、何のしがらみもない娘だ。おまけに王である私に興味を持つどころか、嫌っている。うってつけだと思うだろう」>br< 側室達やその背後に控える権力者達の疑惑を晴らし、そして嫉妬を煽る。まさに一石二鳥。彼女を寵愛することで、きつと奴らは動き出すだろう。ミオはそのための餌なのだ。>br< 酷薄な笑みを刻み、シオンを見上げる。>br<「確かに。ですが……」>br<「おまえが大事なものはこの私だけだろう？ ならば誰が傷付こうと関係ないはず。私のことだけを考える」>br< ミオの身を案じるような言葉など聞きたくなかった。何かを言いかけたシオンを遮り、彼自身の言葉で縛り付ける。>br<「……仰せのままに」>br< 僅かに瞳を揺らし、それでもシオンはデイスの足元に跪いた。>br<「ミオは神からの贈り物。手に入れた大事な餌だ。>br< その身の安全は、何があるうと守ってやる。>br< 心に受ける傷はシオンが癒す

だろう。 >br< だから何も気に病むことなどない。 >br<
あの真っ直ぐな心を、瞳を、この汚れた世界に留めることになって
しまったことを。 >br<

第4章 寵を争う者 (1)

周囲が慌ただしく変化していくのを、どうすることもできずに、ただ流されるだけだった。というか、どう足掻けば王の決定を覆すことができるのだろうか。知っているのなら、教えて欲しいくらいだ。

> b r < まず始めに、新しい部屋が与えられると教えられた。どうもこの部屋は、正式な側室が住むような場所ではないらしい。一夜の情けを賜る者か、もしくは側室にさえなれないような卑しい身分の者にあてがわれる部屋なのだそうだ。

> b r < そう聞かされて腑に落ちた。どうりで他の側室達と顔を合わせないはずだ。

> b r < 晴れて側室として召し上げられることになった美桜には、他の側室と同じ区域に部屋が与えられるのだそうだ。準備が整い次第、そちらに移り住むことになるらしい。

> b r < そして次に採寸をされた。バスト、ウエスト、ヒップはもちろんのこと、肩から肘、肘から手首やなど、驚くほど細かく測られた。美桜のための衣装を大急ぎで仕立てるのだそうだ。

> b r < 今クローゼットにある衣装は、全部シンシアの採寸をもとに作られたシンシアのためのものだ。多少胸元に余裕があるものの、着られないわけではない。実際、今まで着ていたのだが、これらは全て処分されるというのだ。

> b r < 正直もつたいたいと思う。どれも新しいものだし、一度も袖を通していないものだってたくさんある。けれど美桜に口を挟む権限も度胸もなく、周囲の言いなりになるしかなかった。

> b r < 後宮にて側室達や王に仕える者達の間では、美桜は遠い異国から、並々ならぬ事情があつてマイトリイ王国へやって来たということになつていらしい。らしい、というのは、美桜の推測によるものだからだ。

> b r < 侍女の意味ありげな眼差しや、含みのある物言いに、薄々気付いてはいたのだが、^{としかさ}確信らしきものを持てたのは、礼儀作法の指導にやって来た、年嵩の侍女が放った台詞があつたからだ。

> b r < > b r < 『恐れ多くも国王陛下の御側室となられる

からは、言葉遣いから立ち居振舞いを、そのお立場に相応しいものに改めていただきます。特にミオ様のような、複雑なご出身の御方は、何かと人の口に上りやすいものでございます。遠き異国の習慣など一刻も早くお忘れになり、マイトリイ王国の貴婦人としての自覚をお持ちになれますように」>br<>br< 自分がどういう目で見られているのかと思うと、いたたまれない気持ちになる。誰も好き好んで側室になるわけじゃない。完全に王の気紛れが原因なのだ。それなのにどうして、こっちが冷ややかな目で見られないといけないのだろう。>br< 出自に関して、事前に教えてくれないればよいものの、王やシオンからは何の連絡もなかった。まあ、事前に打ち合わせをしても、きつと不愉快になっただけだろう。>br< 何処にあるかもはっきりしない、野蛮な異国の娘が、どんな偶然か王の目に留まり、どんな手を使ったのか気に入られ、とかいう設定になっているのだ、きつと。>br< でも美桜には、そんなことをいつまでもつらつらと考えている余裕はなかった。>br< 昼間は礼儀作法の授業。これがやたらと厳しくて、少し間違えただけでも、嫌味や見下したような視線が飛んでくる。おかげで神経はぴりぴりと張り詰めて、夕方にはぐったりしてしまう有り様だ。>br< 夜は夜で入浴時に痛いくらい体を磨かれて、香油や何かをすりこまれ、疲労困憊でベッドに倒れ込む毎日だった。>br< そんな日々が十日ほど続いたある日、とうとう恐れていた日がやって来た。>br< 美桜の衣装が揃い、部屋の準備が整ったのだ。>br< 引越しいつても、美桜には何もすることはなかった。ただ侍女の先導に従って、自分の足で歩いて行くだけだ。>br< 不安な気持ちを押し隠し、硬い表情で廊下を歩く。気分は最悪で、絞首台に送られる死刑囚みたいだ。>br< 幸いにも他の側室の誰かと会ってしまう、ということはなかった。だがいつまでもそういうわけにはいかないだろう。いずれ、嫌でも顔を合わさなければならぬ日があるのだ。>br<「今日より、こちらをお使いください。中にミオ様付きの侍女が控えておりますゆえ、こ

れからはその者に何なりと申し付けくださいますよう」>br<「
わかりました。ありがとう」>br< 深々と頭を下げる侍女を労
う。開け放たれた扉をくぐり、美桜は部屋へ足を踏み入れた。>b
r<「は……あ」>br< つい、間延びした声をもらしてしまう
ほど、室内は豪華に飾り立てられていた。ただっ広い室内には、無
駄に長いテーブルと、それに見合う数の椅子が置いてある。テレビ
で見る、セレブの部屋なんかにあるような、高級感漂う代物だ。上
を見上げれば、天井にお決まりのようにぶら下がっているシャンデ
リアが、きらきらしいまでの光を放っている。部屋の左右には扉が
三つあり、まだ他に部屋があるようだった。>br< 部屋全体が
白を基調としているためか、清潔感溢れる雰囲気だ。広い窓の外は
直接庭に続いているようで、そこには可愛らしい丸いテーブルと椅
子が二脚ある。天気の良い日は、外で食事をしたり、お茶をするの
かも知れない。>br< それにしても、今までいた部屋とは比べ
物にならないほど豪華な部屋だ。非現実的な空間に、少々居心地の
悪さを感じてしまう。>br<「本日より、ミオ様の侍女として、
努めさせていただくシンシアでございます」>br< 不意打ちの
ように背後からした挨拶の声に、小さく飛び上がった。>br<（
シンシア？ そういえばあの日王様が、そんなようなことを言っ
ていたような……）>br< あの日、ディディエ伯爵一家の処刑を
中止させた日に、シンシアを侍女として仕えさせると言われていた
のだった。>br< ぎこちなく体を反転させ、頭を下げている侍
女に目を向ける。>br< 他の侍女と同じ黒の簡素な衣服に身を
包んだ彼女に、かける言葉を探した。>br<「あ、あの。え、つ
と」>br< 気まずさが先立つばかりで、言葉が見つからない。
>br< すつと頭を上げたシンシアの表情に、疲労の色はなかつ
た。血色もいい。そのことにほつと胸を撫で下ろし、美桜はふと頭
に浮かんだ疑問を、そのまま口にした。>br<「おじ様やおば様
は、どうしているの？」>br< 処刑を免れたのは確かだが、そ
の後の夫妻の処遇は聞かされていない。伯爵領へ帰されたのならば

いいのだけれど。>br<「ミ才様には関係のないことと存じます」
>br<「え?」>br<「ばつさりと切り捨てられ、美桜はぼかんとしてしまう。鏡の向こうにある自分そっくりの顔は、見事に感情を消していて、彼女のきつく纏められた髪と同じく、一分の隙もない。」>br<「そんな、関係なくなんかない。それにその呼び方おかしいよ。『美桜様』だなんて変だよ」>br<「伯爵家にいたときは、『美桜』と呼び捨てにしていたのに、急に改まった話し方をされても困ってしまう。それに伯爵夫妻のことだって、何も知らされていないのだ。気にならない方がおかしいと思う。」>br<「けれどシンシアには、答える気はさらさらないようだった。」>br<「そんなことよりも、今宵は陛下をお迎えせねばなりません。支度に取り掛かりたいのですが、よろしいでしょうか?」>br<「にこりともせずただ淡々と、とんでもないことを言い出した。」>br<「ち、ちよつと待って! どういうことなの?」>br<「そんなこと聞いてない。昼間ならともかく、夜にやって来るなんて、何をしに来るというのだろ?」>br<「嫌な予感に寒気がする。美桜はぶるつと全身を震わせた。」>br<「決まっております。ミ才様は陛下の御側室。そのお務めを果たしていただくだけのことにございます」>br<「美桜の言わんとすることを察したのか、王が何をしにやって来るのか教えてくれた。側室の務めというのが何を指すのか察した美桜は、顔を真っ赤にしたあと眉を寄せ、唇を噛んだ。」>br<「馬鹿ね。余計なことをするからよ。私達なんて放つて置けばよかったのよ。そしたら、こんなことにはならなかったはずよ」>br<「急に普段の口調に戻ったシンシアの、突き放すような台詞に愕然とする。」>br<「あのままだったら、殺されてたんだよ?」>br<「悩んで勇気を振り絞った行動だった。それを余計なことだと言う彼女の気持ちかわからない。あのまま死んでしまってもよかったといわんばかりの態度に、美桜は信じられないというように首を振った。」>br<「そんなもの覚悟の上の計画よ私、助けてくれなんて頼んでいないわ。だからありがとうなんて言

わない。あなたが勝手にした行動の結果が、今のこの状況なのよ。
私はあなたの侍女にしか過ぎない。何の力もないただの使用人。これからはよく考えて行動することね。でなければ、この後宮で上手くやっていけないわよ。……さしあたって、あなたにできることと言えば、陛下の寵愛を得ることでしょうね。何の後ろ楯もないのだから、陛下に厭あきられたらそれで終わりだもの」>br< シンシアが言葉を重ねれば重ねるほど、美桜の顔から血の気が引いていった。今はもう蠟のように白い。>br<「何か言い返さないの？ そんなことではこの先やっていけないわよ」>br< 反論する気力すら失った美桜を呆れたように眺め、シンシアはまた表情を消した。>br<「ミオ様はあちらでお休みください。今宵のお支度は、私が全て手配しますゆえ」>br< シンシアに促され、操り人形のようにぎくしゃくとした足取りで、テーブルのある方へと向かう。>br< 自分が何をしたというのだろう。これは何の罰なのか。>br< 別に感謝して欲しくて助けたわけじゃない。だけど、どうしてそこまで言われなければならないのか。>br< これからこの後宮で、王の顔色をうかがい、彼の気を惹くような言動をして生きて行かなければならないのだろうか？>br< そんなのは嫌だ。絶対嫌だ。誰でもいい、助けてほしい。>br<（…シオン様）>br< 誰でもいいと思いながら、浮かぶのはアクアマリンの瞳で。でもその彼はもう救いには来てくれないだろうとわかっている。>br< 諦めの涙が、美桜の頬を濡らすのだった。

第4章 寵を争う者 (2)

美桜は椅子に座ったまま、ぼんやりとシンシアを眺めていた。忙しなくきびきびと動き回る彼女の仕事ぶりは、とても伯爵令嬢とは思えないものだ。だが今の美桜にはそんなことを感心している余裕などない。

> b r < 大きな陶器の花瓶が用意され、目の前にどんと置かれた。色鮮やかな花を両腕に抱えたシンシアは、にこりとみせず、それらを花瓶に挿していく。ミルクみたいな優しい色をした花瓶には、青い染料で細かな模様が描かれている。花瓶に合わせているのか、持ち込んだ花の中から、純白の大輪の百合や、青くて小さな花を選んで、手際よく花瓶を彩っている。それが終わると残りの花を抱えて、別の部屋へと姿を消した。

> b r < 次に小さなかごを持つて来たかと思えば、その中から香炉のような物を取り出した。部屋の隅に置いて液体を皿に注ぐ。蠟燭を灯し、皿を下から温め始めると、ものの数分ではんわりと甘い香りが漂いだした。きつすぎない優しい香りだ。

> b r < 瑞々しい花も、いい香りも、女の子なら誰でもうれしくなってしまうものだ。だが置かれている状況が状況だけに、心は微塵も動かない。車窓を流れていく、ありふれた景色のようにしか感じられない。

> b r < 何も見えず、何も感じない。ざああつ、というテレビの砂嵐に似た音だけが鳴り響いていた。

> b r < > b r < s > b r < > b r < (何でこんなところにいるんだろう?)

> b r < 美桜はぼんやりと辺りを見回した。

> b r < いつの間にか日が暮れて、重厚なカーテンの向こうには、夜の闇が広がっている。

> b r < 美桜は寝巻きに着替えさせられ、寝室に放り込まれていた。純白のとりりとした肌触りの寝巻きは、いつぞやと違い、きちんと衣服の役割を果たしているのが、救いといえは救いだつた。

> b r < 室内にはキングサイズのベッドが、でんと中央に陣取っている。サイドテーブルの上には真紅の薔薇が一輪、艶やかに咲き誇っている。これもシンシアが生けたものなの

だろう。>br< 甘ったるい香りは、薔薇の花のものではなく、この部屋にも置かれている香炉から漂ってきているようだった。>br< ベッドの中で待つように指示されたけれど、とても素直に従う気になてなれない。壁際にある長椅子に浅く腰掛けて、ただその時を待っている。真紅のビロード張りの長椅子は、触り心地がとてもいい。>br< 見て、触れて、匂う全てを、客観的にしか捉えられない。心は少しも浮き立たない。鉛のように重く、なんて表現があるけれど、そんなものでは絶対に足りない。心に形があるのなら、それをコンクリート詰めになされて、海に沈められたようなそんな気分だった。>br<（どうしよう……）>br< 性懲りもなく、そんなことを考えてしまう。いくら思い詰めてもどうにもならないし、できない。全ては王の思いのまま。まな板の上の鯉とはこのことだろう。>br<「王がお運びになりました」>br< 寝室の外からシンシアの声がした。>br< ついに来たのだ、王が……。>br< 美桜の全身が、びくんと波打った。震えの止まらない体を両腕で抱きしめて、下唇を噛む。>br< 寝室の扉がゆっくりと開き、空気が動いた。衣擦れの音が微かに聞こえ、美桜は更に体を硬くする。>br<「足の具合はよくなったのか？」>br< 落ち着いた声が室内に響く。>br<「……へ？」>br< 思ってもみない台詞に、間の抜けた声を漏らし、すぐ側に立つ王を仰ぎ見た。美桜と同じような寝巻きを着ている王は、形のいい眉を僅かにひそめる。呆れたように溜め息をつく、長い銀髪がさらさらと肩を滑り落ちた。>br<「あの時、痛めただろう。医者には診せたのか？」>br< 苛立ちを見せる碧眼に、慌てて首を振る。>br< あの時——デイディ伯爵一家を助けようと駆け付けた時——急いで馬から飛び降りた際に、左足を挫くじいていたのだ。>br< 数日は痛くて歩くのも億劫だったが、今はもうすっかりよくなっているし、忙しない日常に流されているうちに、そんなことなど忘れてしまっていた。>br< でも王が気付いていたなんて知らなかった。誰にも言っていないし、誰も気付かなかった

のに。> b r <「ではシオンに手配させよう」> b r < 大丈夫だ、と伝えようとした美桜だが、次の瞬間目を見開いて悲鳴を飲み込んだ。> b r <「……っ」> b r < 上半身を折り曲げた王が覆い被さってきたのだ。膝の裏と背中に王の手が回される。あつという間に軽々と抱き上げられてしまった。> b r <「きゃ……やつ」> b r < そのままベッドまで運ばれ、どさりと落とされる。悲鳴を漏らしながら、弾むベッドの上でバランスを取ろうともがいているうちに、王に両手首をつかまれてしまった。> b r <「いやっ、離してっ！」> b r < きつく目を閉じたまま、できうる限りの抵抗を試みる。> b r <「シオンであればよかったか？」> b r <「なっ、そ、そんなことありませんっ」> b r < この状況で何を言い出すのかと、ぎょつとした美桜は、閉じていた瞼を開いた。> b r < 間近にある王の瞳は驚くほど綺麗で、一瞬意識を飛ばしてしまう。息をするのも忘れて、見入ってしまう。> b r <「ふん。おまえの顔にそう書いてある」> b r < ぼうつとしていた美桜だが、追い討ちをかけるような王の台詞に我に返った。> b r <「書いてませんっ！」> b r < まともに見つめ合ってしまった気恥ずかしさと王の台詞の意味するところを想像してしまい、首筋まで赤く染まる。> b r <「私にその気はないから安心しろ」> b r < 素っ気ない言葉と共に、手首から王の手が離れた。密着していた体も離れていく。背中を向けた王についてうっかり、本当にうっかり、ぼかんとして問い返してしまった。> b r <「……は？」> b r <「何だ？ 期待していたのか？」> b r < 絹糸のような銀の髪がふわりと舞い、不敵な、けれどひどく魅力的な微笑みを浮かべた王が振り返った。> b r < どん、と心臓が大きく跳ねる。ベッドに横たわったままだった美桜は、うるさいほどの鼓動に戸惑いながら、急いで起き上がった。> b r <「そ、そんなわけないでしょう！」> b r < 何故だか高鳴る胸に、美桜自身混乱してしまう。不可解な現象を誤魔化すように、声を張り上げ思いつき否定した。> b r <「もう夜も更けた。私は休むぞ。おまえも適当に休め」> b r < そ

んな美桜を面白そうに眺めながら、王はさつさとベッドに横になつてしまった。>br<「へ？」>br< ええつと、これはどういうことだろう。美桜はぱちぱちと瞬きをして、首を傾げた。>br< 部屋にベッドはひとつきり。王はそのベッドで眠るつもりみたいだ。まさか……まさか、同じベッドで眠れというのだろうか？>br<（無理。絶対無理だつて！）>br< いくらその気はないと宣言されていても、それは無理な相談というものだ。>br<「あ、あの……？」>br< 恐る恐る声をかけてみたが、王は目を閉じたままぴくりとも動かない。もう眠ってしまったのだろうか。そうだとしたら信じられないくらい早い早さだ。>br<「どうしよう」>br< ぼそりと呟いて、美桜は肩を落とした。はあ、と溜め息をもらし、のろのろとベッドから下りる。重い足取りで長椅子へ向かい、その上で猫のように小さく丸まると、美桜は瞼を閉じた。今夜はこの長椅子で眠るしかないだろう。余分に毛布が何か用意してもらっておけばよかった。>br< ひとまず、身の安全を保証された美桜は、そんなことを思うのだった。>br<

第4章 寵を争う者 (3)

「あ、いたたた」>br< 朝目を覚ました美桜は、長椅子の上に体を起こし、顔を歪めた。>br<「うう。……ふ」>br< 右腕に体重がかかっていたのか、痺れていて感覚がない。腕を擦りながら、ぼんやりと辺りを見回した。>br<「あ……」>br< 昨夜ベッドを独占していたはずの人物の姿はない。もう起きて、出ていってしまったのだろうか。全く、何を考えているか美桜にはさっぱりわからない。>br< 分厚いカーテンは引かれたままで、時計のない寝室では今が何時頃なのか、見当もつかない。>br< シンシアが起こしに来ていないことから、わりと朝の早い時間帯なのではないかと見当をつける。擦り続けているうちに、右腕の感覚も戻ってきたみたいだ。>br<「……？」>br< 床に足を下ろそうとして、首を傾げる。ぱさりと軽い音がして、床に羽布団が落ちたからだ。眠っている間に、誰かがかけてくれたのだろう。そのお陰で、体は仄かに暖かい。その誰かとは限られている。同じ部屋にいた王が、彼がしてくれたのだと思う。というか、そうなのだが……。>br<（でも、どうして？）>br< こんな風に、不意に優しくされると、何だか居心地が悪い。普段が普段だけに、素直に感謝する気になれない。>br< もやもやする気持ちを振り払うように、軽く頭を振り、ともかく着替えを済ませようと寝室を出た。>br<「……は？」>br< 寝室から出た美桜は、ぽかんと口を開けた。室内には日の光が満ちて、眩しいくらいだったのだ。>br<「おはようございます、ミオ様。すぐに食事をお持ちしますので、お待ちください」>br< すかさずかけられた言葉に、美桜は目を向ける。いつからそこに居たのか、シンシアがひっそりと佇んでいた。>br<「あの、今、何時？」>br< ひとまずそれが知れたかった。>br< おはようございます、と言われても、窓の外に溢れる光を見れば、今が朝でないことは明らか

なのだ。>br<「もうすぐ一時になるところです」>br<「ええっ!」>br< 美桜は突拍子もない声を上げて、シンシアを凝視した。昼過ぎまで寝過ごすなんて普段では有り得ないことだった。それに今日も午前中から礼儀作法を学ぶ予定が入っていたはずだ。午後からはマイトリイ王国の歴史を学ぶ予定もあったのだ。のんびり食事をしている暇なんてない。すっぱかしてしまった礼儀作法はどうしよう。きっと後でひどい嫌味を言われるに違いない。>br<「起こしてくれればよかったのに」>br< 恨みがましい眼差しをシンシアに向ける。それはさらりと受け流され、「申し訳ございません」と、うわべだけの謝罪を口にされた。形だけのものだとわかっていても、謝られてしまうと、それ以上何も言えなくなってしまう。>br< 所在無げに立ち尽くす美桜を尻目に、シンシアはてきばきと着替えを用意すると、すつと顔を上げ、真っ直ぐな瞳でこう言った。>br<「ですが、王の御言葉に逆らうことなど、この私には二度と許されないのです」>br<「へ?」>br<よく似ていると、瓜二つだと思っていた。確かに顔形はやはり双子と言っても通りそうなほど似ている。ただ瞳の奥。緑がかった漆黒の、ガラス玉のように見える瞳の奥に、美桜にはまだない何かが見え隠れしている。>br<「王は仰せになりました。『昨夜は随分と無理をさせた。今日のあれの予定は白紙にせよ。よく眠らせてやれ』と」>br< ぱちぱちと何度か瞬きをして、なんだそういうことかと納得する。窮屈な格好で眠らしてしまったことを、王は王なりに気にしていたのだと思うと、少しは気も晴れるというものだ。取り敢えず、寝坊を咎められることはないとわかり、ほっと息をつく。>br<「王からミオ様に伝言がございます」>br< 用意された衣装を抱え、着替えるために再び寝室へ行こうとしていた美桜は、足を止めシンシアを振り返る。>br<「『今宵も楽しませてくれ』とのことにございます」>br< 真顔で告げられ、一瞬間が真っ白になる。>br<（今宵もって……さっさと眠ってたよね?）>br< どうして今夜もやって来るのだろ。また長

椅子で眠らなければならないのかと思うと、朝から（もう昼過ぎだが）気が滅入ってきた。>br<「王のお気に召したようで何よりです。王の寵愛を得るということは、この後宮では何より大切なこと。寵があるうちに、御子を授かることができれば、ミオ様のお立場も万全なものになります。今宵も、王の御心を捕らえてお離しにならないよう、しっかりとお務めになれますように」>br< 渋い表情をする美桜に、シンシアは無表情ながらとんでもないことを言つてのけた。>br<（夜の……お務めつて？）>br< シンシアの言わんとすることをおぼろげながらに察し、美桜は耳まで真っ赤に染め上げ、猛然と反論した。>br<「ちょ、誤解だつて！ シンシアが考えているようなことは何にもないからねっ！」>br< きつく衣装を抱き締めて、必死の形相で詰め寄る。ぴくりとシンシアの眉が跳ね、小さく息をつく。>br<「何もそんなに恥ずかしがらなくてもよろしいでしょう」>br< 皺になります、と言いついて、美桜が抱えている衣装に手を伸ばしてくる。>br<「だから、違うんだって！」>br< ぱつと体を捻つて、シンシアの手から逃れる。>br< 昨夜の王とのやり取りを思い出しながら、懸命に説明した。>br<「だから、毛布か何かもう一枚用意して欲しいんだけど」>br< どうせ今夜も長椅子で眠る羽目になるのだ。窮屈なのは仕方ないが、せめて暖かくしていたい。>br<「……はい。ですが、王はひどく上機嫌でしたけど？」>br< 納得行かない様子のシンシアに、美桜は心底嫌そうに顔を歪める。>br<「私を困らせて楽しんでるだけだよ。紛らわしいことばかり言ってるのが、その証拠！」>br< 昨夜は無理をさせた、だとか、今宵も楽しませてくれ、だとか。受け止めようによつては、二人の間に何かがあったと思わせるようにな台詞だ。>br<（全くもう！）>br< 優しさだと勘違いした自分が馬鹿みたいだ。本当に嫌になる。>br< 意地悪く光る碧眼が浮かび、美桜は軽く唇を噛み締めた。>br<「……最低」>br< 誰に聞かせるでもなく吐き捨てると、すっかり皺になつてしまつた衣装

を撫でながら、寝室へと身を翻した。 >br<

第4話 寵を争う者 (4)

夕方になると、痛めていた足の診察に医師がやって来た。もう痛みなどないに等しいけれど、大人しく診察を受けた。必要以外口を開かない医師は表情も硬い。簡単な問診と触診だけで診察は終了で

> b r < 「問題ないでしょう」 > b r < と、診察の間中付いていたシンシアに告げると帰って行った。 > b r < やがて夜になり、宣言通り王がやって来た。 > b r < 美桜は長椅子に座り、シンシアに用意してもらった毛布を膝に掛けていた。今夜の彼も相変わらず麗しい。ただし、見た目だけだが。 > b r < 「医師から報告は受けている。問題ないようでよかったではないか」 > b r < 感情のこもらない声に「はい」と、同じく何の色もない声で返す。こちらの様子を観察しているような眼差しに、美桜はうつむいたまま置物のようにじっとしていた。 > b r < 何ともいえない気まずい沈黙の後、王はつまらなさそうに鼻を鳴らすと、無言のままベッドに入った。 > b r < その様子を見て、美桜はほっと息をつく。その気がないと明言されたからといって、はいそうですかと、すんなりその言葉を受け入れることなんてできるはずもない。いつ気が変わるかわからないし、或いは気紛れでそういう気になるかも知れないのだ。

> b r < ここは密室。しかも後宮。そして美桜は彼の側室なのだ。拒むことは許されず、誰も助けてはくれない。 > b r < (……つか、何で来るんだろ) > b r < 心の中で呟いて、溜め息をつく。背中を向けて眠る王を見つめ、困り果てるくらいしかできないのが腹立たしい。 > b r < (……寝よ) > b r < すやすや眠っている王をぼんやり見ていた美桜は、何だか馬鹿らしくなってきた、長椅子に横たわる。 > b r < 何はともあれ、眠らなければ。明日という日は容赦なくやって来るのだ。 > b r < 手足を縮め、小さく丸まりながら、毛布にすっかりくるまる。体が温まると、自然と眠りに落ちていった。 > b r < それから一週間、美桜の気持ちなどお構い

なしに、王は毎夜訪れたのだった。>br<>br<s>br<>br<(もう、勘弁してください……)>br< 美桜はげんなりして肩を落とした。側室として迎えられてから十日。その間、王は毎夜美桜の部屋を訪れていた。そして今日もまた、王がやって来る。>br< いつも二三言葉を交わすくらいで、会話らしい会話もない。毎日何の目的があつてやって来るのだらう。長椅子の上に窮屈な格好で寝る羽目になって、こちらはいい迷惑だ。そろそろ手足を伸ばしてぐっすり眠りたい。>br< 全く何だかなあ、と不満たらたらで、今夜もまた長椅子に座り王を待っている。>br< 最初こそ緊張してびくびくしていたものの、さすがに一週間も経てば置かれた状況にも慣れてきて、今では肩の力も抜けている。>br< 橙色のランプの明かりが、寝室の雰囲気優しくしている、だとか、きつすぎない香油の香りが気持ちを落ち着かせてくれている、だとかを感じられるくらいにはなっていた。>br<「何だ、今日も起きていたのか」>br< 開口一番、余りにも素っ気ない王の台詞。>br<「はあ、まあ」>br< 対する美桜も王に負けず劣らず、間の抜けた返事をしている。>br<「先に休んでいても私は一向に構わないと言つたはずだが？」>br< 整つた容貌に酷薄とも言える嘲笑を浮かべ、王は腕を組み、見下ろしてくる。>br< 確かに、先に寝ている、と言われたことがある。怪訝な顔をする美桜に、王は言つたのだ。いつも同じ時間に来られはしない夜中を過ぎることもあるから、と。>br< 後宮で暮らす美桜は外のことは何も知らない。他の側室達とも未だ顔を合わせることなく、隔離された空間で、毎日規則正しい生活を送っている。シンシアに聞けばいろいろ教えてくれるかも知れないけれど、気安く話せるような雰囲気ではないのだ。>br< 王様という職業がどんなものか想像もつかない。ただ大変なんだろうなあと、漠然と思うだけである。>br<「まあ、そう言われはしましたけど」>br< 言われはしたけれど、先に眠っているなんてとてもではないが、できそうになかった。 だつてぐっすり眠っている部屋に親しくも

ない人が、それも男性が入って来るなんて、ちょっと抵抗がある。
今更何を言っている、笑われそうだけど。>br< 浮かない顔
をする美桜を一瞥すると、王は鼻を鳴らし、いつもの如くさつさと
ベッドに横たわってしまった。そしてこれまたいつもの如く、すぐ
に寝息を立て始めた王の横顔を見ながら、美桜はがつくりと肩を落
とす。>br< (明日も来るのかな?)>br< 結局聞けずじま
い。こんなに毎日同じ側室の元を訪れ、大丈夫なのだろうか心配
になる。源氏物語の主人公、光源氏のお母さんも、帝の寵愛が半端
なかったせいで苛められ、挙げ句の果てに死んでしまっていたよう
な……。>br< (激しく誤解されてなきやいいけど)>br<
自分と王の関係は、寵愛とかそういうのではない。恋愛感情は皆無
なのだ。>br< 確かに、王様はあちらの世界でいうところのイ
ケメンだ。それも超が付くほどの。>br< 美桜は眠る王の横顔
に視線を向ける。>br< 女の子なら誰でも羨む、艶やかでしな
やかな銀髪。顔のパーツは絶妙な配置だし、それぞれの造りも完璧
だ。すつきり通った鼻筋。きりりとした眉。淡く色付いた薄い唇。
今は閉ざされている瞼の奥に隠された、サファイアみたいな瞳。>
br< (あ、睫毛も銀色なんだ)>br< 美桜は気付かないうち
に、眠る王へ近付いて、じつくりとその顔に見入っていた。>br
<「……はあ」>br< 完璧過ぎる美貌に、つい溜め息が零れる。
この顔で優しく微笑みかけられたら、女の子は一発で落ちるに違
い。>br<「それは……ないない」>br< 優雅に微笑む王
を思い浮かべようとして、美桜は苦笑した。微笑む王なんて想像も
つかなかったからだ。馬鹿にするような、嫌な笑い顔は見たことが
あるが、普通に笑っているところなんて見たことがない。そもそも
笑ったりするのだろうか?>br<「何が“ないない”なのだ?」
>br<「……へ?」>br< 不意に聞こえてきた声に、びっくり
としながら慌てて距離を取ろうとしたが、時すでに遅し。>br<
「わああ。何でもありませんっ! ははは、離してください」
>br< がっしり手首を捕まれて、身動きが取れない状態である。

> b r < 開かれたサファイアの瞳が、不快感も露に細められた。ぐい、と腕を引かれ、バランスを崩した美桜は、王の体の上に倒れ込んでしまった。> b r < 「……っ」> b r < 「私の顔に何か付いていたのか？」> b r < 耳元で囁かれ、弾かれたように体を起こそうとするが、何がどうなったのかわからないまま転がされ、気が付いた時には王に組み敷かれていた。> b r < どくどくと心臓が激しく暴れる。乱れた髪が顔にかかって鬱陶しい。美桜はきつく唇を噛み締めた。> b r < 「おまえは少々女としての自覚が足りないようだな」> b r < 呆れたような顔をして、王はあっさりと解放してくれた。> b r < 美桜はあたふたと起き上がり、乱れた衣服を整える。ぐしゃぐしゃになった髪を撫でつけていると、ぽんぽんと頭を軽く叩かれた。> b r < (え?)> b r < 「そんなことではエレンとリジエがさぞがっかりするだろうな」> b r < 愉しそうな王の声に、何となく嫌な予感がする。> b r < 「それ誰ですか？私と何の関係があるっていうんですか」> b r < そろそろとベツドから降りながら、美桜は首を傾げた。> b r < 「まさか知らないのか？ 馬鹿もここまで極めれば、滑稽だな」> b r < 心底馬鹿にした口調に、沸々と怒りが込み上げる。頬を膨らませる美桜にはお構いなしに、王は実に愉しげにこう言った。> b r < 「エレンとリジエは私の側室。それも有力な正妃候補。あの手この手で私の気を惹こうと、涙ぐましい努力をしている」> b r < それが何だと言っただろう。美桜は王の言葉の意味がわからず、黙って立つっているしかなかった。> b r < 「可哀想に、その努力は実らず、王は異国の娘に夢中ときた。二人とも、王の心を捕らえた娘に興味津々だろうな。……せいぜい頑張ってくれ、ミオ」> b r < ぽかんとする美桜に、王は実に綺麗な微笑みを向けたのだった。> b r <

第4章 寵を争う者 (5)

王の言っていた、エレンとリジエという名の二人の側室。何人も側室がいるとは聞いていたが、自分には関係がないと思っていた。だから名前も知らなかったし、知らうとも思わなかった。だけど昨夜王の口から彼女達の名を聞いて、その存在が現実味を帯びてきたのだ。>br<「シンシアは知ってる？ エレンさんとリジエさんっていう名前の王様の側室」>br< 午後のお茶の時間、何気なさ装って尋ねてみた。>br< テーポットを手に、カップに紅茶を注いでいたシンシアの動きが止まる。>br<「ご存知なかったのですか？」>br< そつとシンシアを見上げると、いつもの無表情が崩れている。軽く目を見開いて、驚いているようだった。>br<「あ、えつと。……全然知らないんだよね」>br< はは、と乾いた笑い声を立て、美桜は気まずさを誤魔化すようにうつむく。>br< 礼儀作法や歴史などは教えてもらっているが、側室が何処の誰だとか、その力関係など、誰も教えてくれなかった。もちろん、美桜自身も聞こうとしなかったのだが。>br< ふう、と溜め息のような息をつき、シンシアは止まっていた手を動かした。紅茶を注ぎ終えると、少し思案するように瞳を伏せ、簡潔に答える。>br<「エレン様とリジエ様。直接お会いしたことはございませんが、よく存じ上げております。というか、この国の貴族で、彼女達の存在を知らぬ者などいないかと」>br< きつぱり言い切られ、美桜は苦笑する。>br< 有力な正妃候補だと、王自らが言っていたのだ。やはり高貴な生まれなのだろう。そんな人達と同じ扱いを受けているなんて、悪い冗談のようだ。>br<「あのお二人に何か？」>br< 明らかに不審そうなシンシアの声に、美桜は昨夜の王とのやり取りを話して聞かせた。>br<「……何かあるのでしょうか？」>br< きゅつと眉を寄せて考え込んだ後、シンシアはようやくそれだけを口にした。>br<（シンシアも何

も聞かされてないんだ」>br< もしかしたら彼女なら何か知らされているのでは、と思ったのだが見当違いだったみたいだ。>br<「さあ、何となく嫌な予感はあるんだけど」>br< 他の側室達に会いたいとは思わない。第一、会ってどうしろというのか。同じ側室という身分を与えられていても、美桜と彼女らが相容れることはないだろう。そもそもこの世界の人間でない美桜には、ここ（後宮）はあくまで一時的な居場所でしかないのだ。確かに王の機嫌を損ねれば、ただでは済まないだろう。だが必死になって彼の気を惹き、寵を得ようとする必要はない。>br<（どうしたら帰れるんだろう）>br< 美桜は不意に本来の居場所を思い出した。慣れない場所での生活に追われ、王の気紛れに振り回されて、ゆっくりに考えている暇なんてなかった。もしもこのまま帰れなかったら……。そう思うと急に心細くなる。>br<「ともかく。必要最低限の知識は備えておくべきかと」>br< 黙り込んでしまった美桜の頭上に、シンシアの冷静な声が浴びせかけられた。のろのろと顔を上げると、厳しい表情がそこにあった。>br<「ミオ様はもう少し、ご自分が置かれている状況を、理解なさった方がよろしいかと存じます」>br<「え？」>br< 急に何を言い出すのかと、ぱかんとする美桜に、シンシアが舌打ちする。>br<「本当に馬鹿な娘ね」>br< がらりと口調を変えたことにどきまぎしている、追い討ちをかけるような台詞に凍りついた。>br<「この後宮でああなたの存在は大きなものとなりつつあるわ。それも当然。毎夜王が渡られているのも。他の側室達や、その背後に存在する権力を求める者達は、口惜しさに歯噛みしていることでしょうね」>br< ふふん、と少し意地悪そうに笑む。>br< 腕を組み顎を反らしたシンシアは、大人しい侍女という仮面を外し、今は策略を巡らせる伯爵令嬢という素顔をのぞかせている。>br<「や、でも、王様とは何にもないし、ただ純粹に睡眠をとりに来るだけみたいけど」>br< ここで何か言わなければ話が続かない方向に進みそうなので、圧倒されてはいたが、勇気を振

り絞って口を開いてみる。>br<「例えそれが事実でも、誰も信じないに決まっているでしょう？」>br<「そんなこともわからないのかと鼻で笑われ、なけなしの勇氣はあっさり蹴散らされてしまった。」>br<「まあ、いいわ。あの二人について教えてあげる」>br<「何も言い返せない美桜に、シンシアは薄く笑ってみせたのだった。」>br<「>br<s>br<>br<「その夜は、王の渡りがないと知らされた。」>br<「それを知った時は「やった！」と、内心で歓声を上げた。やっとベッドで眠れる。手足を伸ばして、のびのびできる。さぞやぐつぐつ眠れるに違いない。そう思っていたのだが……。」>br<「結局、美桜はいつものように長椅子に腰掛け、何をするでもなくぼんやりしていた。王が来なくてほっとしているはずなのに、何だか体がしんどい。」>br<「これではまるで来ないはずの王を待っているみたいではないか。」>br<「(習慣って怖い)」>br<「ぶるぶると首を振る。緩慢な動作でベッドまで移動し、横になる。程よい固さのマットレスは、疲れた体をしっかりと受け止めてくれる。長椅子とは比べ物にならないくらい寝心地はいい。当たり前だが。」>br<「眠ろうと瞼を閉じる。けれどじっとしていても眠りが訪れる気配は一向にない。」>br<「……あーもうっ！」>br<「がばつと起き上がり、ぺちぺちと頬を叩く。せつかく広々とした場所で眠れるというのに、全然眠くないなんて間抜けもいいところだ。」>br<「(昼間聞いた話のせいかなあ)」>br<「シンシアの話(二人の側室についての予備知識)を思い出し、溜め息をつく。」>br<「エレン」スプランドウとリジェ」ティミア。二人は二大侯爵家(スプランドウ侯爵家とティミア侯爵家)の出身なのだという。二大侯爵家と言われても、正直ぴんとこないが、何せ大層立派な家柄らしい。」>br<「エレンは少々勝ち気な性格で、豪華な蜂蜜色の巻き髪と翡翠の瞳を持つ、セクシー美女だそう。対するリジェは物静かで控え目な性格で、艶やかな淡い金髪と水色の瞳を持つ、楚楚とした美女らしい。エレンが十九歳、リジェが二十歳だとか。あと家族構成だとか、色々聞いた

はずなのだが、綺麗さっぱり抜け落ちている。>br< 太陽と月のように対照的な二人だが、どちらも大層な美女だというのは確からしい。>br< 煌びやかな美女を想像してみるが、どうにも上手いかない。ごく普通の女子高生だった美桜には、そういうセレブな知り合いなどいなかったのだから仕方がない。>br< よりによってゴージャスセレブに目を付けられる羽目になるなんて、一般庶民にとっては頭の痛い話だ。>br< 誤解とはいえ、王の寵愛をさらっていったと、微妙に恨まれてる（妬まれてる）みたいだし。できれば一生会いたくない。ぐすぐすと考えながら、美桜はいつしか眠りに落ちていった。>br<>br<s>br<>br<「う……ん」>br< 遠くで誰かに呼ばれている。美桜は眠たい目を擦りながら、渋々体を起こした。>br<「ちよつと、起きなさいよ！」>br< 肩をつかまれ、乱暴に揺さぶられる。声の主はもちろんシンシアで、けれどいつものように馬鹿丁寧な口調でないことに違和感を覚える。>br<（ていうか、何で寝室に）>br< 今までシンシアが寝室に入ってまで起こしに来たことなどなかった。血の巡りの悪い頭で考えていると、ああ、と納得する答えが意外にもすんなり浮かんできた。>br< 昨夜は王が来なかったからだ。王とは何もないと言っているのに、変に気を遣われていたのだと、今更ながら理解する。シンシアでさえそうなのだから、きっと誰も信じてくれないに違いない。>br<「今朝、これが届いたわ」>br<と、目の前に差し出されたのは封筒だった。>br<「……手紙。誰に？」>br< 上品なクリーム色の封筒には、蠟（？）で封が施されていた。>br<「何を寝惚けたことを……。あなた宛に決まっているでしょう」>br< 表に書かれた文字らしきものを見せられたが、こちらの文字が読めない美桜には宛名なんて読めるはずもない。>br<「こつちの字、読めないから、シンシアが読んでよ」>br<「え？ ああ、そう言えばそうだったわね。じゃあ、読むわよ」>br< 慎重な手付きで封を破る。便箋を取り出すと、仄かに柑橘系の爽やかな香りが広がった。>br<

< いい匂いだな、などのんびり思っていた美緒だが、手紙を読むシンシアの顔に視線を移した途端、一気に目が覚めた。> b r < 「ど、どうしたの」> b r < 眉間に皺を寄せたシンシアは、舌打ちすると爪を噛む。> b r < 「噂のエレンから午後のお茶へのお誘いよ。同席するのはエレン、リジエ、ミオ。……そして私」> b r < 「ええっ!？」> b r < 昨日の今日だなんて心の準備が、と美桜は焦っていたのだが、シンシアの次の台詞で現実に引き戻された。> b r < 「どうして侍女の私を同席させるのかしら」> b r < シンシアはディディエ伯爵家令嬢だが、今は美桜付きの侍女である。主人達のお茶会に、侍女を同席させるだなんて、明らかに不自然な誘いなのだ。> b r < 「何の企みかわからないけれど。受けて立つてあげるわよ」> b r < 不適な笑みを見せるシンシアを尻目に、揉め事は止めてくださいと、涙目になる美桜だった。> b r <

第4章 寵を争う者 (6)

「噂通り、本当に瓜二つなのね」>br< 艶あでやかな声が、室内に響き渡った。>br< その声を発した人物に目を向ける。美桜のちようと正面にその女性は座っていた。豪華な蜂蜜色の巻き髪は煌びやかで、それ自身がアクセサリのように彼女を彩っている。弧を描く眉。すっきりと通った鼻筋。つんと尖った顎。ぼつてりとした唇に刷はかれた鮮やかな紅。何より印象的なのはその瞳だ。大きなアーモンド型をした翡翠色の瞳には、強い光が灯っている。その容姿から彼女こそが自分を招いた人物、エレン「スプランドウ」なのだろうと美桜は思った。>br<「エレン、少し失礼ですよ。挨拶もまだでしょう？」>br< 涼しげな声と共に、エレンの隣に座っていた女性が立ち上がった。座っている時には感じなかったが、立ち上がった彼女は女性にしては長身で、百七十センチはありそうだ。>br<「初めまして、ミオ様、シンシア様。私はリジェ。リジェ「ティミアです」>br< 微かな笑顔に、美桜はぎこちない笑みを返す。>br< 首を軽く傾けたリジェの肩を、真つ直ぐな淡い金の髪が滑り落ちる。腰まで届く長い髪は、手入れが行き届いているらしく、さらさらのつやつやだ。卵形の輪郭に、抜けるような白い肌。切れ長の目は涼やかで、穏やかな水色の瞳をしている。エレンのように派手な造りではないが、透明感ある美しさを持つ女性だ。>br<「あ、あの。本日はお招き、ありがとうございます。私は美桜と言います。こちらはシンシア。シンシア「ディディエです」>br< 静と動。相反する美を体现する女性二人に見つめられ、美桜の声は緊張のあまり上ずってしまふ。挨拶の後、どうしていいのかわからず立ち尽くしていると、リジェが優しく手招きしてくれた。>br<「どうぞこちらへ。……シンシア様のお席も設けてあるようですけど」>br< どうなさいます、と水色の瞳が、美桜の後ろに控えるシンシアへと向けられる。美桜もつられて後を振り

返った。>br<「いえ、私はミオ様の侍女にございます。主と
同じ席につくなど有り得ません」>br<「私がそれを望んでいたと
しても？」>br< エレンの声が被さるように聞こえてくる。そ
れは命じることには慣れた口調だった。柔らかな中にも、否と言わせ
ない強さがあり、美桜は恐る恐るエレンの様子をうかがった。>b
r< 綺麗な微笑みを張りつけた彼女の瞳は、少しも笑っていない。
鋭く、冷たい翡翠の瞳に、美桜はぶるりと体を震わせた。>br<
(ちょ、迫力ありすぎだよ)>br< 来て早々帰りたくなってきた
美桜とは違い、シンシアは落ち着いているようだ。>br<「私
に命を下せるのは……ただひとり。国王陛下のみにございますれば」
>br< 口角を持ち上げて、うつすらと笑って見せるシンシアに、
美桜は顔色を失った。自分は侍女であるからと言いながら、自分に
指図できるのは王であるデイスだけだと、取りようによっては意味
深な台詞を叩きつけたのだ。>br< どうしてわざわざ挑発する
のか、事無かれ主義を尊ぶ美桜にはさっぱり理解不能だ。はいは
い、とエレンの言うことを聞いていれば、面倒なことにならずにす
むのに。>br<「貴女、本当にシンシアなの？　これだけ似てい
れば入れ替わっていたとしても、誰も気づかないわ。……何を企ん
でいるの」>br< 笑顔という仮面を外したエレンは、剣呑な眼
差しでシンシアを睨む。スプランドウ侯爵家令嬢として生まれ、多
くの者にかしずかれるのが当然だった彼女にとって、今のシンシア
の態度は無礼以外のなにものでもなかったのだろう。すっかり気分
を害してしまったようで、これでは和やかなお茶会などできそうに
ない。>br< だがしかし、ひっ、と息をのみ、わたわたと変な
汗をかいているのは美桜だけである。>br<「エレン様ともある
うお方が、ご冗談を。……ミオ様とお話になればそのような疑い、
すぐに晴れることでしょう」>br< 怒りを向けられてもさらに
と交わし、冷静に対応するシンシアに感心する美桜だったが、ちく
ちくと刺すような視線を後頭部に感じ、ぎくしゃくと首を巡らせる。
>br<(ひいいい！)>br< 悲鳴を上げなかったのは、拍手も

のだろう。怒りに燃える翡翠の瞳が、ひとと自分に向けられていたのだ。>br<「さあ、お茶をいただきましょう。香り高い紅茶をいただけば、少しは気も鎮まるのではないですか」>br< この状況に不似合いな台詞を吐き出すリジエは、涼しい顔で美桜とエレンを交互に見ている。>br<「そうね。楽しいお話をたくさん聞かせてね、ミオ“様”」>br< にこり、とエレンが微笑みかけてくる。だか目は全く笑っていない。瞳の奥で、怒りの炎が燃え盛っている。>br<「あ……は、はい」>br< 若干腰が引き気味の美桜を見て、エレンがさらに笑みを深めた。獲物を見つけた獣のような目に、美桜は萎縮するばかりなのだった。>br<>br<s>br<>br<（か、帰りたい）>br< 一見和やかに見えるお茶会が始まって、ものの数分もしないうちに切実にそう思った。>br< エレンの侍女（ザラという名前だそうだ）が、三人分の紅茶を用意して、それぞれの前に出してから、それは始まったのだ。>br< すぐ香りのいいこの紅茶の茶葉は、なかなか手に入らないそうで、エレンの父スプランドウ侯爵に献上されたものだという。どこそこのなになに、という上流階級では有名な品だそうだが、美桜の耳は左から右へと流してしまう。恐らく地名とか人名が付けられているのだと思うのだが、馴染みがないせいか全く覚えられない。>br< 曖昧な微笑みを浮かべながら、縮こまって紅茶をすすっていると、エレンの容赦ない口撃に襲われたのだった。>br<「どうしてあなたなのかしら？ 私達より優れているところがあるとは思えないわ。ねえ、貴女もそう思うでしょう、リジエ」>br< ねつとりと絡み付く視線に、美桜は琥珀色に輝く紅茶に視線を落とす。始まった、と思った。言葉のイジメ。それはここ異世界でも変わらないみたいだ。>br<「人は見た目ではありません。デイス様の御心に留まる何かをお持ちなのでは？」>br< フォローしているようで、していないようなリジエの台詞に、美桜の心は傷付いた。確かに見た目では二人の足元にも及ばない。そんなことはいちいち口にしなくても、歴然としているではないか。女

の子のイジメは、本当にたちが悪い。>br<「……そう、ね。ではやはりあれかしら。床上手、というのだったかしら。どうやってデイス様を満足させているの？ 是非教えていただきたいものだわ」>br< ほほほ、と笑うエレンの瞳には侮蔑の色が浮かんでいる。>br<「……っ！」>br< 美桜はかつとして、両手を握り締めた。>br<「言葉が過ぎますよ。ミオ様、お気を悪くなさらないで」>br< 違う、と叫びそうになった美桜だが、エレンをたしなめるリジエの手前、言葉をのみ込み、硬い表情で首を振った。>br<「意外だわ。貴女が彼女を庇うなんて」>br< どこか含みのある台詞だが、デイスとの関係を誤解されたまま揶揄され、弁解もままならない美桜は、胸中にわだかまるもやもやした気持ちを持って余すばかりで、二人のやりとりなど聞いている余裕はなかった。>br< リジエは、信じられない、というように肩をすくめるエレンを一瞥する。>br<「デイス様がミオ様を選んだのです。……品性を疑うような言動は、慎んだ方が賢明かと」>br<「ご忠告、肝に命じておくわ」>br< 冷ややかにも見える水色の瞳に、エレンは満面の笑顔を見せていた。>br< それから信じられないことに、和やかにお茶会は続いた。話題は流行のドレスや靴、お洒落な焼き菓子、腕のいい飾り職人などに移り、美桜はまるで置物のようにその場に座り続けたのだった。>br<

第4章 寵を争う者 (7)

エレンの部屋を出た美桜は、ほっとしていた。やっと長いお喋りから解放されたのだ。ただ、美桜が口を開くことはほとんどなく、もっぱら聞き役だったけれど。>br<(つ、疲れた)>br<ずっと緊張していたせいか、全身がひどく重い。少し体を動かすだけで、ぼきぼきと関節が鳴ってしまう。早く自分の部屋に戻って、ベッドの上にダイブしたい。などと考えていると、落ち着いた声に呼び止められた。>br<「彼女、悔しくて仕方がないだけだと思います」>br<振り向いた美桜に、リジエは苦笑しながら近付いて来る。背後にはリジエを迎えに来た背の高い侍女が控えている。何と返していいのか考えあぐねているうちに、リジエが再度口を開いた。>br<「デイス様の寵を得ようと、必死でしたから。お父様のスプランドウ侯爵からも、頻繁に使いが寄越されていたようです」>br<「そう……ですか」>br<無言でいるのも失礼だろうと思い、相槌を打つ。>br<「けどリジエの台詞に頷くような気持ちにはなれない。エレンやリジエに会ったのは今日が初めてだし、それにさつきまで開かれていたお茶会は、あまり気分のいいものではなかったからだ。>br<初対面の人間に、あんな風に言われたことなど初めてで、今は驚きの方が強い。けれど少しして落ち着きを取り戻せば、不愉快な気分になることは確実だった。エレンに同情し、彼女が取った言動を許せるほど、人間ができているはずもない。>br<歯切れの悪い返事と、強張った表情から、美桜の心中を察したのだろう。リジエは少し寂しそうに笑うと、水色の瞳を細めた。>br<「誤解されやすい性格だけど、悪い娘ではないのよエレンは」>br<「ごきげんよう」と会釈してきたリジエに、同じように「ごきげんよう」と返し、会釈する。長い髪を揺らしながら去って行く後ろ姿を見送っていると、シンシアに先を促された。疲弊した体は水の中を進むように重かった。>br<>br<

r<s>br<>br<「もう少し上手くやれるかと思ってた私が愚かだったわ」>br< ほうほうのていで自室にたどり着いた途端、今まで大人しくしていたシンシアが吐き捨てるように呟いた。>br<「……え？」>br< 窮屈なドレスから体を解放しようとしていた美桜は、手を止めて振り返る。>br<「何ひとつ言い返すこともしないなんてね。いい具合にあなたと陛下の仲を誤解してたんだから、もっと嫉妬を煽るようなことを言ってやればよかったのに」>br< シンシアが冷めた目でこちらを見ていた。>br< まるで冷水を浴びせかけられたように、急に意識がクリアになる。そして瞬時に、かつとなった。>br<「何よっ！ 自分だつて口だけだったじゃない。『受けて立ってあげるわよ』とか言つてたくせに、何にも助けくれなかったじゃない！」>br< そうだ。シンシアはずるい。侍女だからという理由で、同席することを断った。そのせいでこっちは、生け贄として捧げられる子羊みたいに、ずっと震えていなければならなかったのだ。きつ、と美桜は自分そっくりの顔を睨み付けた。>br<「だから救いようのない馬鹿だつて言われるのよ。私はあの二人に萎縮して、小さくなつていたわけじゃないわ。あなたと一緒にしないでよ」>br< はっ、と息を吐き、苛々しながら腕を組む。>br<「なっ、何よっ！ 何なのよ。皆で私を馬鹿にして……。私だつて、ちゃんとわかつてる。自分が不器用で、空気読めないって。だから……いつだって我慢してた。言いたいことのみ込んで、無理して笑つて。なのに何で何で私ばかりこんな目に遭わなくちゃならないのよ！」>br< 一度不満をぶつけると、もう止まらなかった。堰を切ったように次々と言葉が溢れてしまう。>br< シンシアに怒りをぶつけながら、頭に浮かぶのは向こうでの日々。友達（だと思っていた）との何気ない会話。弾けるような笑顔を見せる彼女達に、合わせるように笑う自分。無理に口角を持ち上げる度を感じる虚しさ。>br< ——そしてあの雨の日。>br< ぎゅっと手のひらを握り、シンシアを凝視する。彼女に何か言われると、まるで鏡の向こうに

いるもうひとりの自分に言われているような気がして、落ち着かないのだ。だから今の美桜はシンシアにというより、むしろ不甲斐ない自分を責めるもうひとりの自分に怒りをぶつけている感覚だったのかも知れない。>br< 互いに次の台詞を探している時、部屋の扉が開かれた。その微かな音にも、感情を高ぶらせている二人は敏感に反応し、揃って振り向く。>br<「失礼。何度ノックをしても、返事がなかったのだ」>br< 懐かしい声と姿に、美桜の鼓動が高鳴った。普通の白いシャツと黒のズボンでも、すらりとした長身の彼が着ていると、とんでもなく素敵に見えてしまうから不思議だ。>br< シオン「サディク。国王であるデイスの右腕である彼の姿を見るのは、正式な側室として迎えられてから初めてではないだろうか。」>br< 耳障りのいい柔らかな声に聞き入ってしまった美桜だが、シンシアは違ったようだった。>br<「陛下の御側室であるミオ様の部屋に、いくらサディク様といえ、軽々しく訪れるのは如何かと存じますが？」>br< 刺々しい口調で、予期せぬ来訪者を牽制する。>br< シンシアの台詞はもったもなものであった。ここは後宮。王以外の男性が立ち入ることを禁じられているはずの場所だ。>br<「これは手厳しい。……ですが私は王に命じられ、お伺いしているのです」>br< 少し驚いたように見開かれるアクアマリンの瞳。その淡く微笑む顔から、目が離せなくなる。吸い寄せられそうになる体を押し止めたのは、他ならぬシオンの言葉があったからだ。彼がこの場にいるのは、彼の意志ではなく、王の命令があつてこそその結果だと。それが美桜の表情を曇らせる。>br<（シオン様も誤解してたら、やだな）>br< 王が毎夜美桜の元へ通っているという事実は、最早周知の事実だ。エレンやリジエの態度で、嫌というほど思い知らされた。二人の間には何もなければ、誰もがそうは思っていない。だからシオンもきつと……。>br< そう思うと、胸の奥が締め付けられるような気がした。何もやましいことはないけれど、彼の顔をまともに見られなくなる。>br<「お久しぶりです、ミオ様。お元気そうで

安心しました」>br< そんな美桜の複雑な胸中には関係なく、
ずっと側に近付いてきたシオンの声が優しく降り注ぐ。その声に誘
われるように顔を上げた美桜は、ぎこちない笑顔を浮かべて見せた。
>br<「……シオン様こそ」>br< 名前を口にするだけで精
一杯で、言葉が出てこない。>br<「どうぞシオンとお呼びくだ
さい。今の貴女は、王の大切な想い人。後宮に身を置く女性達の羨
望の的なのですよ」>br< 口ごもる美桜を眩しそうに見つめな
がら、残酷な現実を口にする。>br<「そ、そんなこと……」>
br< 違います。違います。そう言えば信じてくれるだろうか
?>br< けれど美桜が口にしたのは、謙遜とも取れる短い言葉
だけだった。>br<「参りましょう。王が貴女を待っています」
>br<「え?」>br< 戸惑う美桜に背中を見せ、シオンは歩
き出した。何処へ行くのかわからないまま、美桜は束ねた長い黒髪
が揺れる背中を追いかける。美桜の背後に付き従おうとしたシンシ
アは、シオンによって部屋に留まるように指示されてしまう。不信
感からか眉を微かにひそめるシンシアだったが、結局大人しく従い、
美桜とシオンを見送るのだった。>br< 綺麗な姿勢で歩くシオ
ンの背中を見つめながら、これから起こるであろう出来事が、きつ
とろくでもないことなのだろうと予想していた。あの王様の指示に
従って、よかったことなどあった試しがないからだ。>br<「大
丈夫ですか? 何か辛い思いをしてはいませんか?」>br< 人
気のなくなつた廊下で、不意にシオンが足を止め振り返つた。>b
r<「……え?」>br< 瞬く美桜に苦笑らしきものを浮かべ
ると、シオンは長身を折り曲げて屈み込んできた。ふわりといい香りが
鼻先を掠める。美桜は思わず息を止めた。>br<「こんなこと
になるとわかつていれば、あの時貴女をあの場合に連れて行きはし
なかった」>br< 吐息が触れ合う距離で囁かれた台詞に、心臓
が止まりそうになる。シオンの手が熱を帯び始めた頬の辺りに伸び
てきた。長い指が肌に触れそうで触れない。切なげに揺れる碧い瞳
に、美桜は呼吸すら忘れて見入ってしまう。>br<「すみません。

今の言葉は聞かなかったことにしてください」>br< 何も答えない美桜の態度をどう解釈したのか、シオンは辛そうに瞼を伏せると、何かを振り切るように再び歩き始めた。>br<（今のって…何？）>br< まさか、告白だったのだろうか。そんな、まさか。シオン様が、私を？>br< 思わせ振りの台詞に心かき乱される美桜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702v/>

Ring

2011年10月1日09時48分発行